宗教心理学研究会ニューズレター

第28号　2018.11.15

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集：宗教心理学研究会発足15周年を迎えて
宗教心理学研究会の過去・現在・未来～これからの宗教心理学を考える ---------- 1
「宗教」の語りを通してみる宗教心理の可能性 ---------- 綾城初穂 2
教育には進歩が見られるのか ---------- ミカエル・カルマノ 3
オウム真理教をめぐる一人の「宗教心理学」研究者の弁明と反省 ---------- 河東　仁 5
「統合的な宗教心理学」への思いと可能性に関する一考 ---------- 久保隆司 7
宗教心理学研究会15周年を祝して ---------- 小泉晋一 9
心理学研究者の信仰 ---------- 齋藤耕二 10
楽しくなければ研究ではない！－宗教心理学研究会十五周年に寄せて－ ---------- 酒井克也 13
宗教心理学事始 ---------- 作道信介 14
宗教心理学のバックグランドと発展へのコメント ---------- 佐藤興一 15
田舎のお寺から，宗教心理学研究会へ ---------- 武田正文 24
宗教心理学および宗教心理学研究会の「これまで」と「これから」 ---------- 中尾将大 25
災害の中，思うこと ---------- 中野美加 27
研究会発足15周年に寄せて ---------- 西脇　良 27
宗教心理学研究会に参加して－今日までの日々を振り返る－ ---------- 橋本広信 29
宗教心理学研究会へのアタッチメント ---------- 森　真弓 30
宗教心理学研究会15周年に寄せて ---------- 渡邉　学 31
事務局からのお知らせ ---------- 34

特集：宗教心理学研究会発足15周年を迎えて
宗教心理学研究会の過去・現在・未来～これからの宗教心理学を考える

2018 年 7 月で宗教心理学研究会が発足して 15 周年を迎えました。15 周年を迎えたこの機会に，宗教心理学研究会の活動を通して，学問としての「宗教心理学」にどのような変化があったのか，果たして日本の「宗教心理学」は前進できたのか，「宗教心理学研究会」に対する評価，批判，これから期待することなど会員の皆さまよりご寄稿いただきました。今回の特集を通して，これからの「宗教心理学」および「宗教心理学研究会」を幅広く考える機会となれば幸いです。

「宗教」の語りを通してみる宗教心理の可能性

綾城初穂(駒沢女子大学)

宗教心理の研究から遠ざかってかなりの年数が経ちます。この間，日本の宗教心理学研究全体が年々と活気づいていく様子を，宗教心理学研究会のニューズレターやメーリングリストを通して拝見しておりました。このたび，「少し離れた位置からこれからの宗教心理学に期待することを書いてほしい」というご依頼を受け，恐れ多いことと思いつつも，今の自分の研究テーマを形作るにおいて重要な視点をもたらしてくれた当時の研究を思い返し，その位置づけを自分の中で今一度明確にするような形で，今後の宗教心理学研究への期待をお伝えできればと筆をとらせていただきました。

私がこれまで暮らし生活してきた実感に基づいて，誤解を恐れずに述べさせていただくと，日本社会において「宗教」はなかなか受け入れられていないと感じます。これは一般的な感覚とはずれがあるかもしれません。正月やお盆，クリスマスといった季節ごとのイベントに，最近ではハロウィンも加わるほど，宗教的な行事は社会に浸透しています。本原稿執筆時点での与党の一つは新宗教を背景とした政党ですし，焼香の作法を知らないと社会人としては恥をかく可能性もあります。このように，宗教にかかわる営みが日本社会の至るところに根付いているのは明らかです。一方で，例えば毎週日曜日にキリスト教会へ行き礼拝を守るという人は相当に少数派と言えるでしょう。私が勤務する大学は仏教を背景としていますが，仏教を信仰する学生に出会うことは稀です。よく言われることですが，特定の宗教への信仰心を持つということにおいて，積極的な姿勢を持つ人は少ないというのが実情だと思います。そればかりか，特定の宗教を信仰するということは，それ自体が懐疑的，あるいは時に否定的に見られる要素となっているのではないでしょうか。実際，「それって宗教っぽいよね」など，「宗教」という言葉で何かが形容されるとき，そこにはしばしば軽蔑的な響きが感じられます。

religion の訳語として「宗教」を用いるようになったのは明治以降と言われています。当時，どのようなニュアンスで「宗教」という言葉が使われていたかは分かりませんが，今のような語感はなかったのではないかと想像します。おそらく現在の「宗教」という言葉は，この 150 年ほどの間に日本の人々が「宗教」という言葉を使って日常的にやりとりしてきた相互行為の，現時点での帰結なのだと捉えることができると思います。このように考えると，「宗教」についての語りは，それ自体が人々の宗教心理を知る上で，非常に興味深い研究対象になるのではないでしょうか。

以前，私の研究（綾城，2011，2014）でインタビューをさせていただいたキリスト教徒の方々は，自らの信仰を「宗教」という言葉で表現しながらも，同時に自らの信仰を「宗教」と記述されることに抵抗感も表していました。これは「宗教」という言葉の意味するところが，当事者と非当事者で微妙に，しかし決定的に異なるためです。インタビューといういわば公的な場（要するに，非当事者もオーディエンスとなり得る場面）で自らの信仰を伝えるためには，「宗教」という言葉を使わざるを得ません。しかし，同時に公的な場だからこそ，「宗教」という言葉の含意をマネジメントしながら語ることもまた不可避となります。インタビュアーの方々にとって，自らの信仰は否定的な意味の「宗教」とは全く違うものだからです。

この研究を通して私は，「宗教」という言葉をめぐって展開される語りは，単なる説明ではなく，語り手が（「宗教」を否定的に捉える）社会との間で自らを構築する一つの営みであると思い至るようになりました。やや極端に言いかえれば，「宗教」の語りは，語り手が自らの宗教心理を構築する行為それ自体であるということです。もしこう考えることができるならば，研究の射程は宗教信者に限られるものではなくなります。人は意識的に宗教を信仰していなくとも，「宗教」という言葉や，それに類する言葉を使っているからです。「それっ

て宗教っぽいよね」という語りは，「それ」として指し示す対象を非合理的で理解不能なものと考えているという表明であり，それは特定の価値観を持った語り手の宗教をめぐる心理を，つまりはその人の「宗教心理」を浮き彫りにするものです。この点では，昨今よく若者の間で用いられるようになった「神」という表現も，現代の「宗教心理」をあらわにするように思います。畏怖という言葉の代替として捉えるにはあまりにライトな感じのする，「神」という感嘆の表明は，現代の若者が宗教に抱く心理，すなわち「宗教心理」をもっとも端的に表している一つの例ではないかと思います。私自身は，現在，研究フィールドを臨床心理学の方に置きながら，クライアントが語るこうした「行為としての語り」を検討していますが，いま見てきたように，宗教心理学研究においてもまた，語りや表現によって構築されていることへの目線は重要な切り口になり得るのではないかと考えます。

私にとって，若者が用いる「神」という表現でもう一つ興味深いのは，その言葉自体が極めて明確に「宗教」を想起させるものであるにもかかわらず，その用法から読み取るに，肯定的な語感を持っているという点です。これは明治以降の「宗教」をめぐる日本社会の価値観に，また新たな変容が起きているということかもしれません。もしそうであれば，こうした変化もまた人々の相互行為を通して生じたはずのものであり，それゆえ現代の「宗教心理」の一端を映し出しているものとも言えるかもしれません。私が知らないだけで，日本社会において宗教それ自体への見方ももはや否定的とは言えなくなってきているのでしょうか。とするならば，私が過去に実施した研究の文脈もすでに変わっているのかもしれません。こうしたタイミングで，いま一度「宗教心理」について考える機会をいただけたこと，大変感謝しております。

綾城初穂（2014）.「聖域」としての個人――日本人キリスト教徒は日本社会の「宗教」ディスコースにどうポジショニングするのか　質的心理学研究, 13, 62-81.

綾城初穂（2011）.　日本人プロテスタントは「宗教」という言葉をどのように語るのか――ポジショニング分析による「宗教」に関する語りの質的検討　宗教と社会, 17, 31-46.

教育には進歩が見られるのか*1

ミカエル・カルマノ（南山学園聖園女学院中学校・高等学校）

「これからの宗教心理学を考える」ことは今回のニューズレターの大きなテーマとなっているが，自分の専門分野の話を前置きにして本論に入る。

タイトルは博士課程のセミナーで指導教員が取り上げた課題である。"Has there been any progress in education?"ー展開された議論は主に「教育」と「教育学」との関係を中心に行われたが，このような議論の面白さの一部は英語の"education"という言葉の曖昧さにある，と私は思った。なぜかというと，日本語に訳すると"education"は「教育」にも「教育学」にもなり得るからである。日本で専門分野を聞かれたときに「教育学」と答えるが，英語で education だけで十分である。

17 世紀のある学者は「学校教育には従来きちんとした方法論がなかった」ことを指摘した。その後，最近の教育学の新しい動きに対して自分が抱いた期待について言及した。しかし，最終的に

*1 筆者は宗教法人のメンバーで，カトリック教会の聖職者（司祭）ではあるが，本来の形をこのままで保ってきたことを誇りとしている。しかも一つの聖典を基盤とする宗教を研究する心理学の前進に関心と期待を持っている。

学校教育は全く変わっていないと嘆いている[*2]。教科書やインターネット等から情報が簡単に手に入り，"active learning"がキャッチ-フレーズになっている現代でも講義を伴う板書はなくならないことに通じるところがあるのではないか，という気がする。

指導教員がその時（1980 年代初めごろのアメリカ合衆国）取り上げた仮説は興味深かった。体罰は学校（そして家庭）から無くなりつつあることは教育実践と教育学の一つの重要な進歩ではないか，と。教育学の研究はこのような教育の進歩に繋がったのか，それとも体罰の減少傾向は社会情勢を反映しているのか。博士論文のテーマにもなり得る仮説であるが，この議論をここで省いて，心理学と宗教の関係について（多少個人的な）感想を述べることにする。

永遠に変わらない，しかも目に見えない真理を追求する宗教，そして観察できる，人の言動の変化を説明できる事実を追求する心理学を合わせればどのような前進が期待できるのであろうか。具体的に，宗教を対象とする心理学には前進が見られ，宗教の理解に貢献したのであろうか。例えば，宗教心理学の研究は宗教の理解，そして宗教を信じる人の自己理解に貢献したのか。

宗教心理学研究会の活動に参加して受けた印象を一言で言えば「前進あり」ということになる。これだ，という明確な内容を示すのは難しいのだが，前進を表すいくつかの動きがある気がする。自然現象を新しい方法で観察・検証するという，科学がもたらす進歩の 1 つの要因は宗教心理学にも見られるが，科学的・客観的な方法を使って宗教的信仰を研究対象とする研究者自身の特徴も前進に貢献していると思われる。なぜかというと，研究会に関わっている研究者はそれぞれの宗教的背景があって，同じ方法論の枠組みのなかで積極的な協力体制を築いて維持することは極めて重要な側面である。換言すれば，宗教心理学は第三者の立場から（例えば宗教の有害な側面を指摘して）研究するのではなく，研究者自身も対象となっているという覚悟は含まれている[*3]。

2016 年の ICP（国際心理学会議）で本研究会の発表を聞いた人の反応を見て，宗教心理学の必要性は自分が考えていたよりも広く認識されていることを感じた。宗教に密接な関連があって，キャッチ・フレーズにもなっている spirituality や mindfulness を見る限り，日本においても宗教心理学研究を評価する動きがある。そのために宗教の社会的役割や影響の事実関係を検証する観点は欠かせない。

先述したように，宗教団体の教理を越えて研究を進める協力体制は重要であるが，教理と実証的な研究方法は対立関係にあるのではないという共通の認識も宗教心理学研究会の基盤となっている。宗教の真理を理解するには事実関係を研究する心理学の方法論は役に立つという理解があってこれからも前進は期待できる。

最後にもう一つの個人的な感想を記したい。心理学が宗教に貢献できる可能性を強調してきたが，これは決して一方通行の動きではない。何故なら，宗教・宗教的現象を対象とすることは，心理学の従来の研究方法を見直すきっかけにもなり得る気がする。

*2 Robert Primack, "Why Education Flounders," Phi Delta Kappan 61:10 (1980)

*3 考えてみれば心理学そのものも自分と全く違う対象を研究する学問ではない。

オウム真理教をめぐる一人の「宗教心理学」研究者の弁明と反省

河東　仁(立教大学)

はじめに

今回の処刑に際して，当時，何らかの形でオウム真理教（以下，オウムと略記）に関わった人間として，口を開くべきだと考え，「弁明と反省」というテーマにて，個人的な感慨を記したいと思います。あの時，わたしが何をしていたのか，何を思ったのか，そして何を間違えたのか，やはり，宗教学的な心理解明の研究者を標榜する存在として書いておく義務があるからです。

ただその前に，一言だけ，管見のかぎりで，従来あまり指摘されてこなかった事柄について記させてください。それは，当事の若者における宗教ブームの流れを汲んで，朝まで生テレビといった番組に，オウムと今一つの教団が初めて登場し，これは危ないと感じた場面のことです。前者は麻原元死刑囚が出演したのに対して，後者は幹部信者しか現れませんでした。

もちろんそのこと自体はどうでもよいのですが，麻原氏が以下の論理を展開しだしたとき，心のなかに一種の警報がなり響きました。それは，「わたしは目が不自由です。そしてこれは前世の業（カルマ）のせいです。だから現世では，良いカルマを積むために修行し解脱しました。そして他の方々にも悪いカルマを積まないよう，活動しています」といったニュアンスの発言です。

と言って教団の武装化への危険性，ましてや「ポア」などという教えを説くことなど，思いも寄りませんでした。そう，わたしが感じたのは，障がいを，それも当事者であることを巧みに利用する弁術の仕方，そのずるさに驚かされたのです。実際，あくまでも個人的な印象ですが，この後，オウムの方が今一つの教団の弁論を圧してしまったように思いました。そこで番組に出演していた島田氏（一学年上の先輩）に伝言をしてくれるよう，テレビ局に電話をしようとしました。しかし見ていたのが前の晩の録画だったため，家内にもう終わっているとたしなめられたことを，今でも鮮明に覚えています。そしてその後，何も動かなかったことも事実です。

以上を書いた上で，自己弁明と自己反省を書きます。

1．自己弁明

オウムが世に出てきたとき，ことに麻原氏の「空中浮遊」の写真を掲げたポスターが駅などに貼られだしたとき，本務校や非常勤先で，このように訴えました。

あの写真はトリックです。結跏趺坐していても，少しぐらいなら，飛び上がれる。それだけのことです。でももう１つ，知っておくべきことがあります。

それは，「感覚遮断」という現象です。人間に備わる５つの感覚器（センサー）への情報を遮断すると，個人差はありますが，かなりの人間において幻覚が発生する。これはなんら神秘的なものでなく，あくまでも生理学的な現象なのです。

つまり感覚遮断の状況に置かれると，存在しない光が見えたり，音が聞こえたり，味がしたり，匂いがしたりする。あるいは，体がふんわりと浮遊する幻覚をもつこともあります。

浮遊体験については，ことに君たちのように若い人びとにおいては，夜になって眠ろうとするとき，自分の体が天井へと浮き上がってしまうといった，「入眠時幻覚」を体験することが結構あります。これも神秘的なことでも，異常なことでもなく，若い人によく起こる，あくまでも生理学的な現象なのです。

でもオウムでは，この「感覚遮断」現象を巧みに用いて，発現してくる幻覚を，超能力が開発された結果だと称しているのです。「空中浮遊」も，体感面における幻覚に過ぎないのです。

2．自己反省①

こうしたことを，当時，あちこちで話していたことは事実です。

でもその一方で，正直，極秘にサリン，さまざまな武器を製造しているなどとは，まったく夢にも

思いませんでした。これは，今でも悔やんでいます。

そしてこうした「見逃し」の要因の 1 つとして，宗教学の研究者としての「奢り」があったことを指摘しておく必要があります。今でも同じだと思いますが，当事の東大宗教学研究室には，ときどき，「わたしは真理に到達した」と称し，その内容を書き記した書状が送られてきました。それに対して，院生だったころ，「あっ，また来たよー，そんなに研究室のお墨付きが欲しいんかなぁ」などと言ったりすることがありました。門前の小僧とはいえ，宗教学を専攻していると，ややもすると，宗教全般に熟知している錯覚に陥ってしまうのです。

そのためオウムに対しても，あれやこれやの教えや行法を組み合わせただけ，そしてそこに幻覚発生メカニズムを付け加えただけの教団《でしかない》という思考停止状況が生じてしまったと，今になって思う次第です。もちろんこの「奢り」はわたしだけのものであったのかもしれません。でもわたしが《でしかない》論をもってオウムを見ていたことは事実です。

3．自己反省②

また同時に，宗教学の分野から新宗教を調査研究する者にとって，特有のスタンスがあることについても反省をしなければなりません。それは，あれこれ変だと思っても，なかなか批判をしにくい，そのため批判を控えてしまうというスタンスがあったことです。

ちょうどあの時期，新宗教に関する大きな事典が作成されており，その片隅にわたしもいました。そして調査対象として割り当てられた教団の1つの本部へ行ったとき（単独でした），明らかにこれは，「宗教ゴロ」と呼ばれる方々が集まって作った教団だと直感しました。また信者さんたちに対して，「感受性トレーニング」（自己啓発セミナーの技法）を用いていることも分かりました。

でも，宗教教団を調査している身として，批判をすると，以後，調査に応じてくれなくなるではとの思いを，少なくともわたしは持っていました。

そのためこの教団に関しても，心理学的な技法をもちいている，と書くのが精一杯でした。

ちなみにその教団の教祖は，後に，詐欺罪で収監されました。そう，法の華三法行です。

これもまた，今でも悔いている事柄です。

以上，長くなりましたが，今後のことをめぐって，2つのことを指摘させてください。

4．今後のことに関して①

教祖が再臨する幻覚は，簡単に発現します。そうした願望をもつ方々が，感覚遮断状況に入れば，容易に再臨の幻覚が生じます。あるいは，憑依や夢という形もありえます。

さらに精神医学の領域に，かつてフランス語にてフォリアドゥ(folie à deux)と呼ばれた現象があります。直訳は「2人での精神病」です。その後，大勢の間でも生ずることから，「感応性精神病」と呼ばれたりするようになりました。

でもそれより「集団幻覚」と言った方が，話が分かりやすいかと思います。妄想もふくめ幻覚は，同じ環境下にある人びとに伝染するのです。

ちなみに，感覚遮断，フォリアドゥなどは，憑依症候群をメインテーマとするわたしの修士論文において，知っているのが当然の事柄でした。

それだけに，今後の再臨妄想，幻覚に関して，憑依現象さらには夢もふくめ，危機感をもっています。

5．今後のことに関して②

「実証主義」への危惧も当時からもっていました。今でいうエビデンスベースド（evidence-based）な技法への過度な信奉に対する疑義です。確かに実証主義，エビデンスに基づくことは，科学の基本中の基本です。

ただこれは，単純化しすぎかもしれませんが，見たものしか信じないという考え方にもつながりえます。つまり逆に言えば，自分で見たもの体験したものは，実証されたと断定してしまう危険性を有しているということです。

以下は 40 年近くむかし，別の新宗教の教団での調査において聴いた事柄です。

この世に霊など存在しないと主張している，当時の某国立大の工学系の教官が，某教団の友人から，科学者なら実験してみろと言われ，その

教団の憑依系の儀式に参加した。すると，「霊にひっぱられ」部屋中を駆け巡らされた。その結果，教団の熱心な信者になった。

ここでその方を揶揄するつもりはありません。でも，こうした実証主義の落とし穴にも，警告を発していく必要があると思います。

おわりに

以上，結局は，えっらそうに自己弁明したにすぎません。

それを踏まえたうえで，最後に，大事なお詫びを記しておきます。

それは他でもありません。この研究会を中心にまとめられた貴重な著書『宗教を心理学する――データから見えてくる日本人の宗教性――』をめぐる件です。この書評を『宗教学研究』に載せる責任を負っていたのですが，ついに力及ばずという結果に終わってしまったことです。これはお詫びしてもしきれないことです。ひたすら恥じ入るだけです。

またこの拙稿において，「実証主義」に対する批判を記しましたが，これはこの著書に対する批判ではまったくありません。自己弁明のタイトルにて記した「感覚遮断」にしても，結局は単なる説明，面白そうなお話でしかありません。やはり今後は，こうした仮説を実証的に論究してゆくことが何よりも求められると思う次第です。

「統合的な宗教心理学」への思いと可能性に関する一考

久保隆司（日本ソマティック心理学協会，山梨学院大学）

はじめに

宗教心理学研究会発足 15 周年，おめでとうございます。「継続は力なり」という直截な言葉，私の大切にするものですが， 15 年にわたって実直に研究会の運営をされてきた松島公望さんもそうだと思います。共に喜ばせてください。以下，僭越ながら，身勝手な「宗教心理学」に関わる思いや考えをシェアさせていただきます。

「出会い」と「きっかけの本」

私がこの宗教心理学研究会に参加したのは，はっきりとは覚えていませんが 2005 年前後でしょうか。月日の経つのは早いものです。当時は，カリフォルニア州のバークレーに住んでいました。「宗教心理学」という言葉でネット検索をしていて，当研究会の存在を知り，入会申し込みのメールを送ったかと思います。

そもそも，「宗教心理学」に興味を持ったのは，『宗教心理の探究』（島薗進／西平直編集，東京大学出版会， 2001 年）に出会ったからです。私は，臨床系，心身系の心理学を学ぶために留学中でしたが，当時は Amazon も現在のように浸透しておらず，おそらく，一時帰国の際にでも書店で見つけたのでしょう。もともと「トランスパーソナル」的な文脈からも，心理とスピリチュアリティの重なる領域には関心があったので，非常に興味深く読ませていただきました。その本の執筆陣をあらためて眺めてみると，現在では，何人かの先生方と多少なりともご縁をいただいていて感慨深いです。ただ一つ残念なことは，この著作の路線上での「宗教心理学」は，これまでのところ展開されていないことでしょうか。

宗教心理学への「実証的アプローチ」の貢献と自己限定

松島さんは，常々，実証アプローチを基礎にした「宗教心理学」分野の確立を唱えられています。この研究会自体，その実現化の途上の組織との性格があります。「実証的手法」は，一つの「客観性を持つ世界基準」として，言うまでもなくとても重要です。ともすれば曖昧になりがちになる「宗教と心理」領域の学術的追求においては，不可欠な基本姿勢であることは否定できません。この路線において，松島さんを中心に，当研究会

の関係者との協働から，日本心理学会などでの毎年の発表や，2011 年の『宗教心理学概論』（ナカニシヤ出版），2016 年の『宗教を心理学する：データから見えてくる日本人の宗教性』（誠信書房）の出版等，着実に形にされてきたことは，素晴らしい業績です。

ただ同時に，「実証的手法」の意味が，今日一般に言われる欧米発祥の「Evidence-based」運動（原理主義？ブーム？）の文脈での手法やその亜流であれば，あまり惹かれない自分がいることも事実です。ステレオタイプ的な解釈で恐縮ですが，心理テスト，アンケートなどで得られる統計的データは，ある程度の量の集積が必要であり，客観的な要素，指標へのある種の還元が要求されるわけですが，そのような「要素」「指標」の設定や「還元」の妥当性の疑問も感じます。また，その過程で平準化される対象者や結果にそれほど興味がありません。

一方，私が主に関心を持つ領域は，心身統合や神人合一と言われるものです。深い（高い）宗教体験やそれに関連する意識段階や状態，心身相関の文脈でのスピリチュアリティの構造と解釈です。このような領域の探究に関しては，個別性と普遍性の双方が重要であり，実践と理論の双方が不可欠です。個別的体験の事例研究／フィールドワークや哲学的／神学的考察，解釈に重点が置かれる必要があるように思います。自ずと，いわゆる「実証的手法」とは，根本的な研究の対象や方法が異なってきます。もちろん，昨今だと統計的と言っても，「ビッグデータ」の活用で，ある意味，より潜在的な領域が可視化され易くなっていて，取り入れていくことに大きな意味もあることでしょう。しかし，従来の実証的観点からは，これらの知見を，何らかの形で宗教心理的な質的分析や深みの解釈への直接的な適用は簡単ではないでしょう。ともあれ，様々な立場から，様々な意見はあるでしょうが，実証的宗教心理学を以って「宗教心理学」と標榜するのは，「宗教」の持つ，宗教が宗教たる所以である本質的な部分での多くの素晴らしい可能性を自ら制限してしまうのではとの危惧は残ります。少なくとも，宗教社会学（一部の機能主義的な？）が持つ「マガイモノ感」を，将来の宗教心理学には持って欲しくないというのが個人的な思いです。単純にいうと，トータル的なバランス感覚が大切でしょう。

「統合的な宗教心理学」の探求と可能性：「Evidence-based」から「Soma-based」へ

「これからの宗教心理学とは何か」という大きな課題があります。もちろん，私自身，この問いに答えられるような見識や（社会的）地位，立場なども持っていないので，無責任に答えさせていただきます。それは，「統合的な宗教心理学」ということではないでしょうか。ここでは簡便な定義として，三人称，二人称，一人称の三つの観点をバランスよく備えているものに「統合」の形容詞をつけたいと思います。荒っぽい分類で恐縮ですが，「実証的宗教心理学」「臨床的宗教心理学」「思想的宗教心理学」の三つの小分類を暫定的に作り，それぞれ，三人称，二人称，一人称に大雑把に対応するとします。そして，これら三つを合わせた統合的な領域を，「宗教心理学」分野と呼ぶことにします。実証的な（とりあえず，三人称的とします）アプローチとその他の（とりあえず，一人称的，二人称的とします）アプローチは両輪だと考えますので，現状のこの研究会の趣旨や意義は素晴らしいものと思いますが，この先もこのままでは，統合的な「宗教心理学」を扱うには狭すぎます。

個人的には，今後，「臨床的宗教心理学」「思想的宗教心理学」のブランチにおいて，何がしかの貢献を模索したい思いです。私自身のここ 15 年ほどの主たる活動領域は，（日本でも最近は多少，知られるようになってきている？）「ソマティック心理学」でした。広義の意味でのこの領域には，「ソマティック・エデュケーション」，「ソマティック・サイコロジー／サイコセラピー」，「ソマティック・スピリチュアリティ」の各分野を包摂できるので，「統合的な宗教心理学」に貢献できる可能性が大だと考えます。ちなみに，ここでの「ソーマ」(soma)とは，主観的，間主観的な「生き生きとした身体（性）」を意味します。

際しては，身体性を基礎とする「Soma-based」という概念の根源性，重要性へのこだわ

りが大切です。それを補完するものとしての「 Evidence-based 」は歓迎です。表層的な「マインドフルネス」ブームがあと数年で落ち着いてから，グラウンディング，心身統合・身心一如に関わる「 Soma-based 」な，実感を伴ったサイコロジーやスピリチュアリティの分野が，今後，特に「統合的な宗教心理学」の文脈においては，ますます大きな意味を持ってくると予測しています。現在，「 Soma-based 」の観点から諸学を再点検，再構築する試みの重要性を認識し，できる範囲（主に心理学と宗教学／神道学領域のいくつかの部分）において，微々たる貢献ができれば幸いです。

おわりに

以上，多くの専門家，先達の皆様の前で恐縮ですが，勝手なことを書かせていただきました。機会を与えていただいた松島さん，ありがとうございます。ともかく，これまでの 15 年，この研究会が続いてきた理由は，事務局を運営されてきた松島さんをはじめとして，多くの当研究会会員の皆様に共有される，一緒に「心理と宗教」についての探究を深め，共にその理解を豊かにしていきたいという真摯な姿勢，誠実さの存在に尽きるのではないでしょうか。それゆえ，方法論や信仰する宗教などにおいて，考え方や立場に（決して小さくない）違いがあったとしても，一定の多様性が担保されてきたような気もします。この研究会は緩やかな集まりですが，（学問の内容が「緩い」とすれば難ありですが）これまでの組織としての「緩さ」は，多様性の確保の意味でも歓迎される要素の一つなのでしょう。

最後になりますが，個人的には，「身体と心と魂が喜ぶ学問」としての宗教心理学を求めていけることを願っています。そのための活動の一環として（？），当研究会との関係も引き続き，維持できれば幸いです。宗教心理学研究会のさらなる発展を祈念しております。

宗教心理学研究会15周年を祝して

小泉晋一(共栄大学)

宗教心理学研究会が発足して 15 年になります。私が入会したのが 2013 年なので，私はせいぜい 5 年間の動きしか知らないのですが，私の入会前には 10 年もの歴史があり，その間にもすでに学会等でさまざまな研究活動と研究発表を展開してきたことと思います。一つの研究会が 15 年間も活動を継続させてきたのはすごいことだと思います。決して大げさなことではなく，私自身の経験から言えば，研究会を立ち上げたとしても 5 年以上の継続を保つことは難しく，多くは先細りして自然に解消してしまうケースがほとんどです。宗教心理学研究会は定期的に研究会を続けているだけではなく，学会でシンポジウムの開催や出版物の発行をしており，日本の宗教心理学研究の灯を守り続けています。

灯といいましたが，日本では宗教心理学を専門とする研究者はごく少数であるため，研究そのものは他分野と比べれば，あるいは海外と比べればかなり低調であると思います。そのような実情の中でも，宗教心理学研究会では一定の実績をあげています。この 15 年間の中で果たした大きな実績といえば，まずは『宗教心理学概論』と『宗教を心理学する』の発行だと思います。特に『宗教心理学概論』では海外の主要な研究が数多く紹介されており，日本の宗教心理学の教科書となるものだと思います。今までに日本では，このような教科書は発行されていませんでした。確かに今田恵の『宗教心理学』や松本滋の『宗教心理学』などが散見されますが，どれも古いものです。『宗教を心理学する』はあまり体系だった内容ではないのですが，量的研究と質的研究との両方が扱われていて，宗教心理学研究の実例集といった趣があります。宗教心理学研究の見本として，これから卒業論文や修士論文などを作成

する若手にとっては参考になる内容です。

心理学の成立の歴史をみる限り，心理学は自然科学の方法論を採り入れて実証科学として発展してきました。それを突き詰めすぎると行動主義のような立場が出現し，それの反動として人間性心理学のような考えもでてきたわけですが，基本的には実証科学的であることが心理学のアイデンティティであると私は思っています。理論があって仮説があって実証研究があって，その中から人間の行動や心理についての一つの側面が明らかにされていくのであり，その手続きは非常に重要です。研究の基盤には心理統計法や心理実験法，心理調査法などの基礎トレーニングが必要で，たいていの学生はそれらを嫌がりますが，そのトレーニングを受けていることがpsychologist としての第一条件であります。宗教心理学研究会はあくまでも心理学研究としてのスタンスで活動しています。巷にはいわゆるスピリチュアル系統の人々が疑似心理学的な言説を振りまいていますが，それとは一線を画すものです。妄説に等しいような言説が世間に蔓延るのは，中村古峡の頃からほとんど変わっていないようです。宗教心理学研究会が継続して発展するための条件として，この実証科学としての姿勢を崩さないことは極めて大事なことだと思います。

現代の日本では超高齢社会，孤独死，医療崩壊，貧困格差，少子化と人口減少，引きこもり，いじめ，児童虐待などのさまざまな社会問題を抱えています。これらの問題は日本人の宗教性やスピリチュアリティ（霊性）とも大きく関係する問題のように思われます。これらの問題は今後ますます深刻化していくことが予測されます。これまで宗教心理学研究会は学会で研究成果についてさまざまな発表を行ってきましたが，設立から 15 年を迎えた今，社会に対しても宗教心理学の立場からさまざまな提言を発信してもよいような時期にきているような気がします。宗教心理学は日本の心理学の中では未だにマイナーな分野ではありますが，人間の生活にとって非常に大切なことを扱っている分野であり，今後のますますの発展が期待されます。

心理学研究者の信仰

齋藤耕二

命には限りがあり，いつかはその終わりとしての死を迎えなければならないことは誰しもが知っている。そして死を恐れ，生命を出来るだけ長引かせようとする試みは長い歴史を持っている。医学はこのような動機を基礎として発展してきたと言えるだろう。しかしそれが幾分かの成功を収めているとしても，不老，不死の追求が究極的に実現される可能性はないと断言できるだろう。生と死を巡る課題は人間の避けられない問題であって，その解決を提供してするのが宗教の重要な機能となっている。

宗教学者，岸本英夫の「死を見つめる心ーガンとたたかった十年間」(1964 ，現在は講談社文庫)は癌が見つかり，医師から余命半年と宣告されてからの生と死の問題についての思索と生き方の記録である。刊行から 50 年以上を経た今日でもこの本が読み継がれていることは，どのように生き，死を迎えたらよいのかという課題に対する岸本の回答に多くの人たちが共感と支持を表していることを示していると私には思われる。「死によって肉体が崩壊すると，感覚器官や神経系統も消滅する。脳細胞もまったく自然要素に分解してしまう。生理的構造が何もなくなった後で，「この自分」という意識だけが存在することが可能だと考えようとするのは，相当に無理があるのではなかろうか。

これは，近代においても，人によってその見解の異なるところがあるように思われる。私自身は，はっきりいえば，そうしたことは信じることが出来ない。そのような考え方はどうも，私の心の

中にある合理性が納得しない。それが，たとい，身の毛がよだつほど恐ろしいことでことであるとしても，私の心の中の知性は，そう考える。私には，死とともに，すなわち，肉体の崩壊とともに「この自分の意識」も消滅するものとしか思えない。私自身は死によって，この私自身というものは，その個体意識とともに消滅するものと考えている。」

このような見解に対して，宗教家から「健康で死の実感がないからそのような強いことがいえるので，死に直面したら，多くの人と同じように神にすがり，来世を信じて死んでいくに違いない」と批判されたという。しかしガンが見つかり，余命を宣告された生命飢餓状態の苦しみの中にあっても，そのような解決に頼ることはなかった。

「まっくらな大きな暗闇のような死が，その口を大きく開けて迫ってくる前に，私は立っていた。私の心は，生への執着ではりさけるようであった。私は，もし，自分が死後の理想世界を信じることができればどれほど楽だろうと思った。生命飢餓状態の苦しみを救うのに，それほど適切な解決法はない。死後も，生命があるのだということになれば，はげしい生命飢餓の攻勢も，それによってその鋒先をやわらげるに相違ない。

しかし，私の心の中にある知性は，私にするどくよびかけてきた。そんな妥協でお前は納得するのか。それは，苦しさに負けた妥協にすぎないではないか。その証拠に，お前の心自身が，実はそういう考え方に納得していないではないか。そのするどい心底の声をききながら，私は，自分の知性の強靭さに心ひそかな誇りを感じ，そして，さしあたりの解決法のない生命飢餓状態にさいなまれながら，どこまでも，素手のままで死の前にたっていたのである。」

敬虔なキリスト教の家庭に育ち，子ども時代にはそれなりの熱心な信仰を持ちながら青年期に神を捨て，死を目前としても宗教的信仰に戻ることなく，知性を頼りとして，岸本は生涯を終えたのである。宗教について幅広い専門的知識と深い理解を持ちながら，あるいは持っていたために，来世，復活，永遠の命などの宗教的仕組みを拒む道を選んだのである。

宗教を研究対象とした研究者が全てこのような道をたどるわけではない。ピーター・バーガー「現代人はキリスト教を信じられるか－疑惑と信仰のはざまで，2009」(Peter L. Berger, "Questions of Fath：A Skeptical Affirmation of Christianity", 2004)は，今日に生きる人々の宗教的信仰への疑問に応えることを目的とした本である。著者は社会学者として数多くの著書と共編著で知られている。知識社会学と宗教社会学の分野を専門としているが，神学者と見なしているものもあるので，一般の素朴な信徒ではないだろう。この本は新聞の書評にも取り上げられ，ごく短い期間に増刷されているので，かなり幅広く読まれたものと思われる。

ちなみに，宗教心理学研究会のメンバーによって作られた「宗教心理学概論」(金児暁嗣監修，2011)を見ると，「聖なる天蓋－神聖世界の社会学，1979」(The sacred canopy.1967)と「日常世界の構成，1977」(Berger,P.L.,& Luckumann,T. The social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledg.1966)が引用されている。前者では世俗化としての非聖化について，後者は第一次的社会化と第二次的社会化の区別に関連して引かれている。このことからも宗教心理学との関連の深さがうかがえる。

バーガーはこの本は「信徒の神学」の実践を目指すもので，自らは疑惑と信仰のバランスの中にあるリベラルなプロテスタントの立場に立つものであると述べている。そしてこの本の構成が，キリスト教の礼拝で唱えられる「使徒信条」に沿っているから明らかにようにキリスト教の信仰への肯定を内容としている。

この本の結論となる最終章は，使徒信条の結びのことば「からだの復活，永遠の命を信じます」に従って，「身体のよみがえり，永遠の命」を題目としている。

この章は死，とりわけ無垢な幼い子どもの死を受け入れることは出来ないと宣言することから始められているが，パウロのことば「死者の復活がなければ，キリストも復活しなかったはずです。そして，キリストが復活しなかったのなら，私たちの

宣教は無駄であるし，あなた方の信仰も無駄です」(コリントの信徒への手紙)を確認して，死という個人的終末と宇宙の消滅に検討が進められている。ロビンソン，クルマン，ヒックス，ハイムなどの見解に触れた後で，ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の中のイワンとアリョーシャの対話にたどりつく。そして，「キリストによって，途方もなく大きな救いの力が世界に放たれた。キリストの苦しみと十字架の死によって，すなわち神の謙譲の極みにおいて，神は被造世界のすべての苦しみをともにし，その修復を始められた。そして，キリストは勝利者として再び来たり，被造物を神が意図された本来の栄光へと立て直してくださるだろう。」という文章でこの本を結んでいる。

キリスト信仰へのこの肯定的結論に到達する論理的道筋は私の理解を越えているが，バーガーが身体の復活と永遠の命を認め，信じていることは明らかである。岸本とバーガーという二人の宗教の研究者は宗教についてまったく正反対の姿勢を示しているがその違いは何に由来するのであろうか。いろいろと考えさせられるが疑問が残る。

私はかつて祈りについての心理学的研究のレビューを試みたことがある(「祈りの心理学」，「賛美に生きる人間」所収， 2008)。その時に出会った本に，マイケル・アダムス「精神分析を受けに来た神の話－幸福のための 10 のセッション，2009 」(Michael Adamse, "God's Shrink: 10 sessions and life's greatest lessons from an unexpected patient. 2007)がある。この本は，ガブリエルと名乗るクライエントとの精神科医の 10 回の面接記録という形をとったフイクションであるが，著者のアダムスはイェール大学大学院で臨床心理学を専攻し，マイアミ大学で博士号を取得している。この本の出版当時はノヴァ・サウスウエスタン大学助教授のポストに在籍していているとされている。そしてアメリカ軍退役軍人の治療に当たった経験を持つているとのことである。現在の著者紹介にはライター，プロデューサーとなっているので，臨床心理学を背景とするライターと見てよいだろう。この本の最後の章，第 10 回のセッションには「祈り」というタイトルがつけられている。仕事の上でも，私生活においても行き詰まりに直面していた精神科医が神との対話によって前向きな姿勢を取り戻し，生き生きとした人生への道を開かれるというお話である。カウンセリングのプロセスをモデルとしているのであろうが医師と患者の関係を精神科医と神としたところにアダムスのメッセージが込められているのであろう。

現代の社会においては宗教はかつての影響力を失い，衰退の道をたどっていると言われている。そして無用なものとなり，やがては消滅するであろうとさえ予想されている。その一方，社会が変化する中で分業化が進み，宗教は政治，経済，社会保障などの領域から退いて，その本来の機能に変化するにすぎないとも言われている。

岸本は，「人間と宗教－問題の所在を尋ねて－」という章で，苦しみや悩み，とりわけ生と死という人間的問題に関連して，限られた一面という断片的にではなく，包括的な解決を提示することが宗教に特別な領域であると指摘している。

「宗教の問題をつきつめてゆくと，結局，人間の問題になる。人間の問題に対するじゅうぶんな理解なしには，真の意味の，宗教の理解はない。

人間の問題は，究極的には，二つの根本的な課題に，還元することができるように思う。すなわち，「人間はなんのために生きているるか」という課題と，「人間はどう生きてゆけばよいか」という課題とである。第一の「なんのために」という問題は，人生を，総合的にまとまった一つのものと考え，それ全体としての，目的やゆくえを問うているのである。第二の「どうすれば」のほうは，この世の人間生活のなかにおける人間の根本的な態度としての，生きてゆきかたを聞いているのである。この両者は，あい関連した意味をもつ。ともに重要である。しかしこの両者は，かならずしも，いつでも平均して，おなじ力で現れているは限らない。個人的な性格の差や，文化的伝統の相違，時代的潮流の変化などによりその強調点が，一方に傾くばあいが多い。」

突き詰めると，宗教は人生の目的と生き方という問題に対する解決を提案することを役割としていることになる。現代では，第二の課題，「どう生

きればよいのか」という問題への答えが求められていると指摘している。

岸本，バーガー，アダムスのそれぞれの本はこれらの著者の宗教観や神に対する姿勢を反映している。そこには，宗教の本質的機能と現代社会におけるさまざまな社会的機能との関連についての認識の相違があるのではないだろうか。とりわけ宗教と科学や技術の関係をどのように考えるかという問題が潜んでいるように思われる。

心理学，とりわけ宗教心理学の研究者が岸本が提示したような人間的課題に対してどのように考え，対処しているのかは非常に興味深い。

楽しくなければ研究ではない！
ー宗教心理学研究会十五周年に寄せてー

酒井克也(出雲大社和貴講社)

宗教心理学研究会発足十五周年，大変芽出たきことと存じます。これもひとえに松島事務局長のコンダクトのもと，個性豊かなハーモニーを奏でる会員の皆様のご尽力の結果です。この輪に入れていただいていることの貴重さを，あらためて実感致します。今後ますますのご発展を祈念するとともに，私も微力ながら寄与すべく努める覚悟を致す次第でございます。よろしくお願い申し上げます。

さて，この節目に寄せて思うことなどをいくつか。研究会が 15 年目ということは，十周年のころに入会させていただいた私も，もう 5 年以上お世話になっていることになります。ここ最近のよき思い出は，ICP（国際心理学会議）2016 にて，私の所属する出雲大社教での調査（とても小規模ではありますが）の結果について発表させていただいたことです。フロアは海外の研究者で満席となり，質疑応答の際には「あなた自身が教団の一員でありながら，客観的な調査や分析ができるのですか？」というご質問をいただきました。返答に窮していると，別のかたが「こうした調査研究の場合には，そう厳密に客観性にこだわらなくてもいいのではないか。特に質的な調査においては，こうした主観的な考察も必要だろう。」という内容のご返答をいただきました。

宗教を「心理学的に」研究すると言っても，何をして「心理学的」とするのかは，研究者の立ち位置により様々でしょう。あくまでも客観的で，エビデンス・ベイストな，いわゆる「数量的研究」の立場もあれば，少数の人間の「語り」を丁寧に吟味する「質的研究」の立場もあります。私自身は，宗教の提供する「生と死」に関するナラティヴを中心に研究をしているので，質的研究がベースにありますが，両者はまさに車の両輪で，お互いが補完し合う関係にあることは明らかです。そのことに関しては，やはり 2016 年にお手伝いをさせていただいた，広島大学の杉村和美先生を中心とした，ヨーロッパ青年心理学会の調査(The Relationships between Identity Formation and Religious Beliefs among Japanese Young Adults; 2016)を思い出します。その調査結果の数量的データから，神道信者の宗教性は「自然」「神秘」に大きく関係していることが示唆されました。これは，私が漠然ととらえていた神道のありよう（この世のすべての事象を神々の意思ととらえ，その神々と対話・交渉をするために祭祀を執り行う）を，明確に定義づけてくれたのです。エビデンスというものの価値を認識した次第です。

今後の話としては，数量的／質的，客観的／主観的という視座をバランスよく取り入れ，神道というとらえどころのない宗教（人によっては宗教ですらない世界）を分析し，発信することが私自身の課題です。実感として，海外の研究者の方々が神道に興味を持ってくれています。それに対して私が直接発信をするには，英語力などがまだまだ未熟で，マサミ・タカハシ先生やクリーグ波奈さんのお力にすがっている現実があります（お

世話になりっぱなしでスミマセン！）。研究内容も，自分が神道を実践する中で感じ取っている宗教観を，どのように明確に具体的に表現できるのか。これはなかなか難しいことです。

方向性というか，「何のための研究か」という問題も気になっている点です。ややもすると「いかに宗教が必要か，有用か」ということを実証したがってしまうバイアスが自分の中にあります。だからこそ，反対に「そもそも宗教なんて必要なのか？」という視点を大事にして，クリティカルに思考し続けたいとも考えています。「そもそも，宗教心理学研究会に所属し，研究する必要はあるのか？」とクリティカルに考えたとき，私が初めて参加した宗教心理学研究会のミーティングで，東洋大学名誉教授でいらした故・恩田彰先生がおっしゃった言葉を思い出します。「研究は，楽しいからやるのです。楽しくない研究は続きません。」

神道という世界のナラティヴって，とっても楽しいんです。この楽しい世界を，一人でも多くの人たちに伝えることも，考えただけでワクワクします！　やっぱり私は，まだまだこの研究会で楽しませていただこうと思います。皆さま，お荷物ですが今後ともよろしくお願い申し上げます。

宗教心理学事始

作道信介

日本で最初に宗教心理学といわれるものが生まれたのは，私がテープレコーダーを持って卒論（「牧師の入信動機についての一心理学的考察ー回心について」）のために牧師さんにインタビューし始めた頃だと思われる。そして私は牧師の息子で宗教心理学に興味を持っていた。（当時は，宗教心理学という言葉自体があまり普及していなかった時期である。）

その調査方法は，父に紹介された対象者一人一人に「何で回心したか」を聞いてまわる方法だった。それは，大橋英寿先生と一緒にやった沖縄フィールドワークの方法論に影響を受けたものだった。

後に知ったことだが，対象者の中に E.H.エリクソンの『青年ルター』を翻訳した牧師先生がいたことが，私の研究にとっての僥倖だった。

次にやった調査（後の修士論文「"回心(conversion)"についての心理学的研究ー宗教的社会化の立場から」）では，教祖的な指導者に密着してそこに集まる若者たちの生き方に宗教性の発達を見た。

この過程が私にとっての宗教心理学研究の事始である。

そして，その論文に影響されて宗教心理学に興味を持った松島君たちが集まってできたのが宗教心理学研究会である。

二つの論文とも，人間関係に重きを置いている。重要なのは，人間関係の繋がりである。このことを忘れず研究に邁進してほしい。

宗教心理学のバックグランドと発展へのコメント

佐藤興一

はじめに

本年の 6 月下旬，JAXA は，地球から 2 億 8 千万 km 離れた小惑星「リュウグウ」に，小惑星探査衛星「はやぶさ 2 」が到達し，地球外の生命存在の実物証拠採取を試みると報じた。成功すれば，生命が宇宙に遍在している可能性に現実味が出てくる。生命観と宗教的心性には深い関係があるため，宗教心理学的にも興味深いテーマが生まれていくことが予想される。このような時代背景も念頭に入れて，本稿では，宗教心理学に関わる一部の根本的な問題と実際的な問題を取り上げ，今後の発展への若干のコメントを試みた。

1．宗教心理学研究における先人の努力に思う

人間というものが，完全性を希求して止まない存在であることには，異論がないものと思われる。それゆえに，その対象が人物に向う場合は，教祖や各方面の偉大なる指導者や聖賢への思慕となり，その対象が人間以外の自然に向う場合は理論神への思慕となり，すべての事物に向う場合は，いわゆる汎神論的な神の肯定となる。したがって，人間の宗教的心性を考える場合，その根源を特定の宗教思想だけに求めるのではなく，努めて宇宙における自然現象の中に求めていくのが正しいのであろう。人間自身も宇宙内の自然現象として地球上に生存している。

宗教心理学の創始者とされるウィリアム・ジェームス（ William　James ）も，宗教創始者の思想に焦点をあてて立論したわけではない。彼の初期の研究は，神学者であった父親からの影響は別として，人間の生理学的・医学的・生物学的な仕組みの探求を経て，次第に人間という存在の中に宗教的心性が潜むことを感じていくという経過を辿っている。ただ，身体現象の探求は科学の範疇に入るから，当時の科学のレベルで解明できる範囲の研究に限定されていた。残念ながら，当時はまだ，人体を原子・分子レベルで解明する手段は無く，ましてや，物質の究極の姿が粒子かつ波動であるクウォークのような素粒子で成り立ち，素粒子の特異な性質が，将来において，人間の心の動きの解明の一つの鍵になるであろうことなどは想像できる時代ではなかった。その結果，哲学者でもあったジェームスの宗教心の分析は，どうしても最終的には哲学的・文献学的なものにならざるを得なかった。

旧東京帝大の福来友吉の初期の研究でも，人間の生理学的な方面の科学的根拠を基盤にした人間の心理の解明を試みているが，心がいかにして他人に伝達されるのかという独自の視点を持って探求するうちに，心は物質化して空中を伝播するという奇想天外な仮説を立てたため，「念力の存在の証明」へと迷い込み，研究者としては当時の公的な立場を失う経過を辿った。仮説に対して，その課題に風穴を開ける周辺諸科学の進歩が十分でなければ，解決の道を探ることは困難となる。だが「心がいかにして他人に伝達されるのか」という課題そのものは，極めて心理学的なテーマなのであり，今日でも研究の課題価値を失っていない。

2．心とは何か

多くの研究対象をもつ心理学は，"心理(心)"を人間に所与のものとして仮定した"「心理(心）」の「学」"としても存在しているし，"心"そのものの存在を科学的に探求しようとする，"「心」の「理学」"としても存在している。「心そのものの正体」については，クオリア問題という難問を抱えて，前進出来ないのが現状であって，人体を含めたすべての物質を構成する素粒子の性質を援用して心の正体に迫るには，量子力学の今後のかなりの進歩が必要となる。ロジャー・ペンローズ(Roger Penrose)は量子脳理論の中で，「意識は脳の中のマイクロチューブルで起きる波動関数の収縮」であるとしているが，「心」の科学的定義は，現代の量子脳研究においても，このような抽象的なものである。だから，心の精妙な働きについて，自然科学はまだあまり解明してはいないとも言え

る。そうであっても，量子脳理論の研究者は，将来，素粒子の性質から，心の性質の片鱗を推定することは可能になると考える。また，現代の認知科学は，自我(心)は神経細胞のネットワークであって，心の物質的根拠は実在しないという立場に立っている。

一般には，科学的研究の基本姿勢は不可知論であるとされ，客観的本質的な実在は認識不可能であるとして，対象を経験的事実の範囲に限る立場をとる。さらに，科学的研究の方法的原則から，再現性のない事象を対象にしないのが普通である。それでも，例えば，すべての物質を構成する 16 の素粒子の中で，ボソン（ボース粒子）という用語で分類される素粒子が，同時に同じ場所に存在できるという不思議な性質（量子の重ね合わせ状態）を持つとされることから，人間が持つ重合的な複雑感情は，遠い将来，素粒子の性質からある程度説明できる時代がくるであろう。そうだとすれば，宇宙内存在としての人間が，宇宙に普遍的に存在すると思われる法則的なものを感じとる「身体的根拠」の一部を獲得できることもあり得る。

心の物質的根拠が実在しなくても，人間が感覚としての感情を実際に持つということは否定できない。動物や植物に深い関心を持つ人の中には，しばしばその形状や，働きの信じられないような精密さに，「崇高さ」としての感情を持つ人が多い。それは，人間の脳や感覚器官の中に，神聖さを「感じる」ネットワークが存在していることを意味し，宗教的心性の原初的な形態ともいえるであろう。

3．法則性を希求する宗教的心性

「科学は意識の表面を観察し，宗教は意識の内面を追求する」といわれるが，学としての宗教心理学が，この科学・意識・宗教の結節点としての位置にあろうとすれば，人間の宗教的心性の存在根拠を，科学からの知見と，宗教の祖師や賢人がその「感性（優れた感情ネットワーク）で捉えた」宇宙の法則性に求めていかなければならない。それは科学の範疇を拡大することになるから，科学哲学的には微妙な問題を孕むことではあるが，人間の宗教的心性が，人間自身の脳による錯覚の産物に過ぎないということになれば，人間は「宇宙的存在として生きることの深い意味」の基礎をどこに求めていくことになるのであろうか。方法としての科学的研究は目的論的であってはならないが，人間の日常的な営みには目的意識が先導的役割を果たすし，個人差はあるが，宇宙を対象とする思考にも敷衍されていく性質をもっている。宇宙の法則性を求めて行こうとする感情が，科学的研究の先導的役割を持っていることは科学史的にも否定できない。実利性から離れた科学的研究では，なおさらその感情は純化した形となり研究対象に魅惑を与えてきた面がある。そこには科学者が持つ一種の宗教的心性が発露している。

現代の社会学系および進化生物学系の学問に携わる人の中には，宗教は人間進化の過程において意識の中に形成された現象であるから，社会の進歩につれて宗教の存在価値は消滅していくと考える人がいる。このような発想は，動物行動学者・進化生物学者リチャード・ドーキンス(Richard Dawkins)が『The Selfish Gene』で用いたミーム（ meme ）の概念が根底にある。ミームは，習慣や技能が人々の間で模倣され遺伝子のように伝達されることから，その「伝達情報を指すもの」として提唱された科学用語である。ミームの進化は遺伝子の進化との類比で捉えられるばかりでなく，遺伝子とミームの進化が脳の進化を通して相互に影響を受けるとされることから，宗教を必要としない方向に進むことが人の進化なのだとされる。それは果たして正しいのだろうか。制度としての宗教は，時代によって変わり得るものであるが，人間の本性としての宗教的感性は，制度を超えた次元で備わっていると見るべきではないだろうか。そうでなければ，人間の存在にとって有用性を伴う範囲を遥かに超えた大規模宇宙の未知に対して，人間が取り組む動機を説明が出来なくなろう。ミームは様々な人間行動の解釈に一定の有効性を持つ概念とされていることは事実であろうが，コンピューター科学者リチャード・ブロディ（ Richard Brodie ）が，宇宙についての新しい知識が，文化や人の行動をどのように規制していくのかというような，未来性の思考

に，ミームという概念は無力であると言っていることは的を射ている。

正常な人間は，通常，完全なるものを志向して思索し行動するものであるとポジティブに考えるならば，宇宙の中に「法則性という"完全情報"」を感知する能力に長けた人間がいても不思議ではない。事実，17 世紀以前の科学者の思考には，宇宙に法則性が存在し，それは，数学という強固な後ろ楯によって保障されており，科学者の使命は，宇宙を統括する神のような存在によって与えられた崇高な法則性を発見することにあるとする「信仰に似た信念」があった。その詳細は記さないが，そのような信念が，古代から 17 世紀までの科学者や賢人に共通する研究姿勢であったと言わねばならない。

現代においても，アインシュタインのように，キリスト教徒でありかつ比類なき聡明さを持った物理学者は多数いて，信仰人としての生き方と科学者としての生き方に，内的な乖離を感じているわけではない。だから，科学の発展をキリスト教からの迫害との戦いで勝ち取ったものであるかのような捉え方をすることは，大変な誤りである。また，科学的事象を記述する記号言語として，数学が学問の中で特別の地位を与えられ，その下にサイエンスという個々の学問があるという発想も誤った認識であり，数学の本質に対する無理解でもある。論理的な筋道の表現には，数学が道具として必要であり，審美的な表現には，文学や芸術などが役割を担っているし，不可視な事柄や存在論的な事柄の感得には，人間の優れた感性がよく呼応するに過ぎない。

4．宗教的心性の問題は，感性の問題であること

かつて，空間論で著名な数学者・物理学者であるダフィット・ヒルベルト(David　Hilbert)は，アメリカのプリンストン大学に招かれて，数学という「系（公理と定理が一つのシステムとして成立している体系）」が完全であり，数学という完全な宇宙が存在していることを，世界的頭脳を集めて証明しようとするヒルベルト・プロジェクトなるものを立ち上げたことがある。ところが，ウィーン大学のクルト・ゲーデル（ Kurt　Gödel ）は，1931 年に数学の無謬性の証明は不可能であることを「様相述語論理」によって証明し，「不完全性定理」として発表した。それは，神が存在するとしても，理性では認識不可能であることを意味していたので，ゲーデルの「神の存在論的証明」として有名であるが，ゲーデルがその証明で用いたのは，「自然数論を含む帰納的に証明できる公理系」という「限定された系」であり，証明は未完なものであった。その後，数学者でありコンピューター科学者であるグレゴリー・チャイティン（ Gregory　J. Chaitin ）は，情報理論の分野でゲーデルの不完全性定理と類似する現象が起きることを発見し，1987 年にコンピューター言語 LISP を用いて数学全般に不完全性が働くことを証明した。彼の発見は，「ゲーデル・チャイティンの不完全性定理」と呼ばれている。

この結果は，学問全体に深刻な問題点を提起するものとなった。つまり，数学は物理学を初めとする自然科学のみならず，哲学や経済学などの社会科学を記述する最も完全な記述言語とされていたが，学問のあらゆる系が不完全であることは，人間の知の体系のすべてが不完全であり，「全知全能である神によって創造された完全な系」というものはこの世には存在せず，神は存在しないことが「論理的」に証明されたことを意味していた。この証明を受けて，1991 年に宗教哲学者パトリック・グリム(Patrick　Grim)は「グリムの定理」を提唱し，「神は存在しないことの証明」を行った。

このような流れもあって，認知科学方面では，神や絶対者の存在を感じるような神秘体験は，神が存在するから実際に体験したのではなく，体験の情報を，脳が情報処理を誤って，神が存在するとの観念（情報）として作ってしまった結果であるとの見方をとるようになった。それでも，神に救いを求める人間が現実に多数存在するということは，不確定・不完全な世界に対する人間の強烈な恐れが原因しているからなのであろうか。

ゲーデルやチャイティンが述べようとしたことの要点は，人間の理性に対して素朴な信頼を寄せることの危うさと，「絶対的真理」というものを人間の理性によって捉えることの不可能さであった。概念を思惟する能力としての「理性」と，印象を受

け入れる能力としての「感性」に明確な境界を想定することは困難でもあるにも拘らず，記号論理で表現し得ない感性の領域を除いた「神の存在論的証明」に，はたしてどれだけの意味があるのであろうか。ちなみに，感性の不完全性を証明しようとした人は，未だいないし不可能である。だから，宗教的心性の根源が，感性が発生する仕組みの中に存在すると推定することは否定されないであろう。ましてや，感性すら人間の脳の産物であるとされるならば，極論すれば，哲学・心理学・思想・芸術・宗教などに関連するすべての学問は，存在根拠を見出せなくなるであろう。

どんな学問も，根源的な事柄は，その存在を暫定的に仮定しなければ学問自体が成立しないという面を持っている。教育学においても，人間の成長可能性を前提としなければ視点を設定できない。法律の世界でも，例えば，刑法における刑の重さを決める根拠は，判例や状況証拠の内容によるしかない。科学的宇宙論でもビッグバン・インフレーション理論で説明できない事象がいくつかあり，プラズマ宇宙論の方がその部分をカバーできる点もあるが，主流としては前者を前提として現在の研究が進められている。宗教心理学においても，「宗教の定義」の吟味を棚上げし，宗教的心性の存在を前提にして学的構築を進めざるを得ない。実際には，純技術的な世界を除けば，定義しようとしてもトートロジーになって定義出来ない概念（いわゆる無定義術語）は多い。宗教を宗教以外の用語を用いて定義しようとすれば，その言辞の中に宗教と同一の内容が内包され失敗に終わる。

このように考えると，宗教心理学の重要な作業課題は，人間が宗教的心性を有することの「現象面の確認」と，その宗教的心性が「内的または外的行動として発動される様式」を吟味することではないであろうか。

5．宗教的行為の科学的考察の一例

例えば，宗教的行為と考えられている「祈り」について考える場合，① 祈る行為の動機の分析，② 祈ることによる身体の変化，③ 祈られる側への効果などが，宗教心理学的内容となろう。そして，現代の科学を援用すれば，①②の課題の一部には，切り込むことは可能になってきている。

①，②について：肯定的な動機による祈りが，祈る側の身体に，βエンドルフィン・ドーパミン・オキシトシンといった快楽物質の分泌を促すことが実験で判明している。それに対して，慢性的に悪意を持ち続けることは，脳がコルチゾールというストレスホルモンの分泌を出して対抗するため，結果として脳の海馬に萎縮が生じ，記憶力の減退をもたらすことがfMRI(機能的核磁気共鳴法)による観察で分かってきている。また，否定的な動機による祈りは，未来につながる「展望的記憶」をもコントロールして，日々の生活の質を低下させることも分かってきている。つまり，肯定的な祈りの効果は大きい。

③について：「祈られる側への祈る効果」の存在性については，個人相互間の効果の表明だけでは客観性も再現性も担保出来ないから，現在の科学は，測定する方法も検証する方法も持たない。

祈る際の"しぐさ"も，宗教的心性が発動される様式であるから，宗教心理学の対象になる。 祈るという行為に，なぜ両手を合わせる行為が付随するのかということは，実は非常に深い内容がある。密教の秘儀としての「手印」は，祈りにおける人間の感性を鋭敏にする行為であり，チャクラの展開と深い関係があり，人間と宇宙との交信・宇宙の「気」の摂取などと関連しているとされる。両手を合わせる行為の源流もそこにあるのであろう。ただし，この方面に，宗教心理学が，方法論を確立しないままに研究対象を拡大することは，前述の不幸な例のように，迷路に陥る危険性がある。永い時代を経て，人間の感性に格段の進歩があれば，その時代の科学的知見のレベルで，祈りという行為の有意義な解明が可能になるであろう。なぜならば，宗教的心性そのものは，理性的なものではなく感性的なものであると思われるからである。

6．生命の存在性と有限性から見た宗教的心性について

人間の宗教的感情は，人間が有限の生命を持つことに由来する。そして人間は，宗教的感情を生じせしめる源として，宗教的心性をその発生

段階から有していると考えられる。そのような人間がなぜ地球上に存在するのかについては，以前は，地球上の海水の「有機体のスープ」から化学的な過程を経て発生したものと考えられてきたが，近年は，生命の自然発生説を否定した実験で有名なラザロ・スパランツァーニ（ Lazzaro Spallanzani ）が 1787 年に提唱した「地球上の最初の生命は宇宙からやってきた」とする説が極めて有力な候補とみなされている。この説は，発想の奇抜さから，当時は滑稽扱いされたのだが，発生過程を実証的に検証することが不可能であることから，消去法的に脚光を浴びてきた仮説である。生命存在に対して過酷な環境をもつ宇宙空間を通過して，隕石や惑星が生命の種となるウィルスを地球に運んだとするこの仮説は，1906 年にスヴァンテ・アレニウス（ Svante August Arrhenius ）によって「パンスペルミア仮説」と命名された。この仮説は，『生命の起源』で著名なアレクサンドル・オパーリン（ Aleksandr Oparin ）が提唱した「生命化学進化説」よりも時代的に先行している仮説で，化学進化を否定しているのではなく「地球上で無機物から生命は生まれた」ということを否定している。アレニウスは，「生命の起源は地球本来のものではなく，他の天体で発生した微生物の芽胞が宇宙空間を飛来して地球に到達したものである。」と述べている。このパンスペルミア仮説が支持されるのは次の点である。

第一に，地球誕生後数億年で，あらゆる生理活性・自己複製能力・膜構造を有する生命体が発生したとは考えにくいことである。すなわち，パンスペルミア仮説は，有機物から生命体に至るまでの期間に相当の猶予が持てるという利点がある。

第二に，宇宙から飛来する隕石の中には，多くの有機物が含まれており，アミノ酸，糖など生命を構成するものも多く見られる点である。

第三に，地球の原始大気は酸化的なものであり，グリシンなどのアミノ酸が合成されにくいことと，地球外にはユーリー・ミラーの実験に相当する還元的な環境の存在が否定出来ないという点である。

パンスペルミア仮説は第一の理由で支持されることが多い。地球誕生後の数億年という年月が，生命の発生にとって短いのか長いのかという点の確証がないため，パンスペルミア仮説を完全に否定することは現在のところ難しい。さらに，小惑星探査衛星(はやぶさ 2)が地球外の惑星から生命の実物証拠を地球上にもたらす可能性がかなり現実的になったことにより，パンスペルミア仮説は，仮説でなくなる可能性が濃厚になってきた。

どのような生命体が宇宙内で存在可能なのかということについては，宇宙物理学と宇宙生物学が解明を続けていくが，「生命がなぜ発生したか」，「人間という宇宙内存在物が太陽系内の単なる一惑星に過ぎない地球になぜ存在したのか」といった謎に答えを出すことは出来ない。だから，人間が，生命の存在理由について，殊の外強い関心を持つという点については，極めて「宗教的にして心理学的な関心事」とならざるを得ない。

銀河系内には太陽のような恒星が 1000 億個程度存在し，さらに，宇宙には銀河系のような銀河が，ボイド構造をなして 1000 億個程度存在するとされているから，理論上は，地球外生命体を宿すことが出来るハビタブル（生命可能）惑星が無数にあることになる。 2017 年に，NASAが，太陽系外惑星の中に複数のハビタブル惑星が発見されたとする論文を，イギリスの有力科学雑誌「ネイチャー」に発表したことを考えれば，生命の存在という厳粛な事実が，地球という範囲を超えた視点から俯瞰されても不思議ではない時代に入ってきたといえよう。生命が存在するということは，自らが生命である人間にとって，人間同士の関係のみならず，人間と生命あるものとの関係全てに対する共生の在り方を，人間自身が問われるということであり，古の教祖や聖賢や各方面の偉大なる人物の多くが，宇宙規模の視点で思索したのが，まさにそのことであった。

人間の生命がなぜ有限なのかについては，遺伝子の老化メカニズムの面から研究されていて，染色体の先端にあるテロメアという部分が細胞分裂するごとに縮小し，やがて寿命が尽きるとす

る「テロメア説」と，活性酸素が細胞障害を誘発し寿命を縮めるとする「フリーラジカル説」が有力だが，人間の寿命が約 120 歳で尽きるように，細胞が"宇宙によって創られている"という「厳粛さ」を科学は問題にしない。「生かされている」「創られている」と感じる人間側のセンサーは，理性を伴う「豊かな感性」であり，それを擬人的に言えば，宇宙が，すべての宇宙内生命の中で，人間にも「与えた」稀有な特性であると言えよう。「なぜ与えたのか」については，「理性の暴走を防ぐため」ということになろうか。アダムとイブの聖書神話にもその含蓄がある。

7．宗教心理学における測定の問題

人間の寿命が"創られている"ことを非常に肯定的に捉える人にとっては，120 年も生かされるのは有難いと感じるであろうし，最も否定的に捉える人にとっては，120 年という数字に，強い不快感を伴った有限性を感じるであろう。個々人の感じ方には大差がある。したがって，感じ方の感覚そのものが個人の「宗教的心性の"質"」を示していると言えよう。その「質」を測定の対象にしていくことが，高齢化社会を迎えて，意味ある時代になってきた。生物学的に限定された寿命を"命"と見るか，その限定を超えたものも"命"と見るかの問題は，科学的思考の枠を超えた事柄を含む。どこまでを心理学の測定射程にいれるべきなのであろうか。「宗教的心性の質」を測定内容とする評定尺度が出来れば，原理的には，個人レベルでの宗教的心性の成熟度合いを調べることが出来る。そして，そのような課題は，「"宗教心"理学」の本命的課題の一つであるといえよう。ある程度参考になる評定尺度としては，QOLD(Quality of Life and Death)評定尺度(丸山，2001)のように，(自己が宇宙の一部であることの認識:Spiritual Connectedness)の項目を含むものもあるが，科学的宇宙論を基礎におくQOL 評定尺度，または，QOLD 評定尺度を作成することも必要となろう。

宗教観の測定における問題点にも触れておきたい。日本人の文化として定着している仏教は，伝来の過程で中国の儒教と道教の影響を強く受けており，中国に渡った仏教は華厳経・法華経・大般若経の内容に変容し，更に最澄や空海が日本に持ち帰った仏教は密教の要素も加わったものだった。したがって「空」の思想と「無記の教え」によってブッダが"否定した"とされる「魂の存在」については，日本の宗派や精神団体によっては，事実上，"存在が肯定された"内容として世間に流布されている面がある。つまり，日本人の仏教理解には，日常的生活教訓としての受け止め方と，来世観を色濃く反映する教えに共鳴する受け止め方があり，人それぞれの理解度や体験内容によって両者のウェイトは異なる。金児暁嗣の宗教観尺度（金児，1997）を用いた相澤秀生の研究（松島・川島・西脇，2016）では，仏教の霊魂観念の得点がキリスト教の得点を上回っているが，仏教が複雑な伝来経過を辿っていなければ，このような結果は生じないと思われる。そして，本来のブッダの教えが，日本人に十分には浸透してないことが，観測目的外の結果として読み取れる。一般論からすれば，キリスト教における福音思想や復活思想は，霊魂の概念と相容れないものであるから，霊魂関連の評定項目については，キリスト教に親和性を持つ人にとって評定不能になるであろう。これらは一例であるが，他の宗教の宗教観についても，その宗教独自の死生観や，教えの伝播過程や，発祥地内外の受容傾向などを勘案して，観測変数と下位の評定項目を検討することが必要であろう。

8．これからの宗教心理学

ほとんど全ての学問は，純技術系の分野を除けば，基礎論としての根本的課題と実際的課題を携えて全体として進歩していくものであるから，宗教心理学は，実際的課題に対してもアドバイス可能な領域を更に開拓していかなければならないであろう。なぜならば，臨床宗教師や教誨師は勿論のこと，終末医療に従事する医師や看護師，文部科学省や厚生労働省管轄の各教育現場の教師，葬送関係者などは，人間の生老病死に関する知識と，人間として相手に対する共感性を持たなければならないからであり，学的なサポートが必要だからである。

教育現場に関連する例をあげれば，平成 20 年の日本学術会議・日本宗教学会共催のシンポ

ジュームで，京都大学(当時)の氣多雅子教授が「特定の宗教と結び付かない宗教的情操教育は存在しないという主張が，宗教的情操教育の可能性を閉ざしている」と述べたことの意味は重要であろう。かつての中央教育審議会答申「期待される人間像」には，「すべての宗教的情操は生命の根源に対する畏敬の念に由来する～」の文言があったが，それは，人間が宇宙によって生かされているという「事実」から必然的に導かれるところの，公共性のある視点であった。しかし，答申そのものが賛否両論の渦の中に巻き込まれていた。だから ，"感性の教育"が不可欠であることを示すには，特定の宗派思想を超えた視点での根拠の提示が必要とされる。その意味でも，今後も，宗教心理学が学的なサポートを担うことが求められるであろう。

感覚を遥かに超えた規模を持つ大規模宇宙構造の中で，ほとんど全ての人間は，その中の一つの星（地球）の薄皮（せいぜい大気圏）の外にも飛び出していない。科学技術が，数学の論理と電磁波の性質を用いて，不可視を間接的に可視化して宇宙を科学的に観測し，宇宙の構造を研究しているのだから，人間が実際的に可視的に把握出来る事象や知識は，大規模宇宙から見れば微々たるものに過ぎない。不可視の世界は果てしなく存在する。今後も，マクロ宇宙・可視的宇宙・ミクロ宇宙の各分野で，科学的知性がメスを入れていくことは続いていくが，人知をもって知りえない根源的な問題は，太陽のエネルギーが尽きて事実上地球の生命体が存続しえなくなる推定 30 億年後までは残っていく。優れた物理学者はそのことを熟知しているが，一部の宗教が，科学の確実性の部分だけを教義の後ろ盾に使おうとする傾向があることを科学研究は常に警戒する必要がある。

宇宙が，現在の宇宙論の主流となっているビッグバン・インフレーション理論で示されるように誕生したのならば，現在の宇宙にもインフレーションの膨張による熱的死が未来において到来し，その後の過程で，宇宙空間における「真空の量子論的揺らぎ現象」により，再び「無数の宇宙」が生じてくるというシナリオが，現在の理論物理学や宇宙物理学では，大方の支持を得ている。そこから，宇宙そのものが，人間のように輪廻する存在と同型なのだという考え方も出てくるし，人間も地球も含めたすべての存在が，宇宙から射影された存在なのだという考え方も出てくる。だから，人間の短い一生に対して，「ほとんど永久に存続する母なる宇宙」の存在に対する畏敬の念と，「万物を宿し生命を化育する宇宙」への限りない感謝の念が，宗教的心性の本質なのではないだろうか。

科学的宇宙論の知識の大衆化は，人間の生き方を吟味させる方向や，無責任な宇宙小説のようなものが蔓延る方向など，人間の宗教観に今後かなり影響していくものと考えられる。そのとき，宗教心理学はどのような手法をもって，人間の宗教心を分析したらよいのであろうか。いずれにせよ，根拠を示して発言する姿勢が学的なものである限り，宗教心理学は，人間誰しもが持つ心情や行動原理，すなわち，体験的知識特有のバイアスがかかった素朴心理学から，宗教的心性由来の言動や行動原理を抽出するために，主成分分析法や因子分析法といった方法で詳しく吟味することを今後も続けていかなければならないであろう。実証的宗教心理学の手法を用いた地道な研究も，その意味で欠くことが出来ない。

おわりに

ほとんど無限の広がりを持つ宇宙の中で，人類が知りえた物質（素粒子）は，全体のせいぜい僅か 4 パーセントであることが，すでに現代の宇宙物理学の定説となっている。一部の唯脳論者が「宗教は脳が作った産物に過ぎない」と言ってみても，人間は脳の機能のすべてを理解しているわけではなく，所詮，定説の範囲内の話であると考えて間違いない。もともと，学的に処理するということは，課題に対して特定の切り口を設定して調べることであるから，設定した切り口で容易に解明出来ない場合は，果敢に切り口を変える必要がある。心理学も切り口探しが続いていく。脳科学も同様であろう。また，過度に思慮深い人の中には，大自然（宇宙）は，簡単には「心の発生」の「からくり」を人類に「開示」はしないであろうという諦念的な考え方を持っている人もいる。

その発想には到底賛同出来ないが，それほど自然が未知に溢れていること自体が，宗教心理学の存立基盤なのだともいえるかもしれない。だから，宗教心理学の射程は広く深く魅力的といえる。

人間の宗教的心性の存在を否定することは，「理性」という狭い範囲で考えれば可能であるが，人間は豊かな「感性」を持っている。 宗教的心性はその領域の問題でないかと思われる。宗教心理学は，現場的な感覚とデータを蒐集分析し，実生活次元の話題として社会に還元することも今後の課題と思われる。

研究会が大きな区切りの歳月を迎えるにあたり，祝意を込めて所感を綴ったが，学的には，言い過ぎているのではないかと指摘される部分もあるかもしれない。少しでも参考になれば望外の喜びです。

＜備考＞

・「様相述語論理（ modal predicate logic ）」は，標準的な数理論理体系に，「～は必然的に真である」ことを示す必然性演算子と，「～は可能である」ことを示す可能性演算子を追加して，様相の真偽を判定する論理だが，その使用例としては，高橋昌一郎「ゲーデルの哲学：不完全性定理と神の存在証明」講談社 1999 に，神の存在証明として一部掲載されている。ゲーデル・チャイティンの定理を最終的にまとめたパトリック・グリムによる「神の非存在の証明」は， Patrick Grim「 The Incomplete Universe: Totality Knowledge and Truth 」MIT Press1991 に掲載されている。なお，この種の証明は，哲学的思考の産物であるので，人間の感性との接点がないという意味では心理学の対象とは異なる。

・ユーリー・ミラーの実験： 1953 年にユーリー・ミラーとスタンリー・ミラーの二人が行った原始生命の化学進化仮説に関する歴史的実験として知られるもので，生命体に不可欠の蛋白質の構成要素であるアミノ酸の実験的な合成に成功した。現在では，最初に生命が誕生した時期の大気の組成とは異なるとしてこの実験は歴史的意味しかないが，この実験を契機に生命の誕生が科学的に検討されるようになったことの功績は大きい。

・福來友吉についてはネットで紹介されているが，飛騨福來心理学研究所の保存資料には初期の論文がある。博士の初期の研究動機は否定されないが，晩年は，いわゆる擬似科学の方向に進んだことで知られる。下記参照資料の道又爾『心理学入門一歩手前：「心の科学」のパラドックス』p.125 ～ p.130 に関連記事がある。

・ブッダの霊魂観については，中村元博士と宇井白寿博士の論争が有名で，松本史朗「仏教の批判的考察」（溝口雄三他編『世界像の形成』東京大学出版会 1994 所収)も参考にした。私が晩年の中村博士にお会いした時に私的に伺った範囲では，博士はブッダの生活哲学的教への理解が「まず大切」なのだと言われたことを記憶している。その意味するところを深く斟酌する知恵を持たない。

・ fMRI は，外部から組織を傷つけることなく脳機能を計測する方法の一つで，医療機器であったが，このような測定テクノロジーの進展によって，高次脳機能，言語，記憶，意図，意志，情動などの心理作用を解明する手段として，この 20 年急速に利用が拡大してきた。

・今日の科学的宇宙論は，理論物理学・宇宙物理学の急速な進展と相俟って多くの宇宙創成仮説を提供しており，宇宙方程式の解から「虚(キョ)の宇宙」を想定するものも出現している。そのような宇宙は，原理的に実証が完全に不可能である。ただ，虚の世界をどのように解釈するかによって，不可視的世界の存在を想定する説も登場している。宗教心理学としては，一応，その問題の行方を注視しなければならない。宇宙創成仮説そのものは，検証不可能であるから，科学理論の公準を満たさないのであり，永久に仮説で在り続ける。したがって，宇宙についての神秘的感情は人類が存続する限り消えないのであろう。地球の運命について一般的に推定されていることは，太陽は約 50 億年後には中心部の水素の燃焼が終末を迎え，赤色巨星と呼ばれる状態となり，半径が増大して最終的には地球を飲み込む状態が生じるとされる。そこから推定して人類を含む生命体は，今から 30 億年後以前に終末を迎えるとされている。終末以後は，「現在の宇宙」

と異なる(宇宙定数と呼ばれる物理定数の数値が異なる)世界が出現するとされるが，人類はすでに消滅している。人類が「現在の宇宙」に一度限りの存在であることをどのように考えればよいのであろうか。

＜参照資料＞

Richard Brodie,Virus of the Mind, The New Science of the Meme, Hay House Inc.,1996（リチャード・ブロディ 森弘之訳『心のウィルス』東洋経済新報社 2013 ）

Francis Hitching,The Neck of the Giraffe or Where Darwin Went Wrong, Pan Books Ltd.,1982

Theodosius Dobzhansky, Evolution of Life, University of Chicago Press, 1960

Susan J.Blackmore,The Meme Machine, Oxford university Press,1999

F.D.Ommaney, The Fishes Time-Life, Publications, New York,1964

Elizabeth.H.Blackburn,Elissa.Epel,The Telomere Effect; A Revolutionary Approach to

Living,Younger,Healthier,Longer,Orion Spring,2017

Fred Hoyle and Chandra Wickramasinghe, Evolution fro m Space, J.M.Dent & Sons Ltd.,London,1981

ジェレミー・ J.グレイ著 好田順治 小野木明恵訳『ヒルベルトの挑戦』青土社 2003

J ・ファング著 高木亮一訳『ヒルベルトの世界』東京図書 1977

リチャード・ドーキンス著 垂水雄二訳『神は妄想である：宗教との決別』早川書店 2007

ジャック・モノー著 渡辺格 村上光彦訳『偶然と必然 現代生物学の思想的問いかけ』みすず書房 1972

キム・ステルレルニー著 狩野秀之訳『ドーキンス vs.グールド』筑摩書房 2004

グレゴリー・ J ・チャイティン著 黒川利明訳『知の限界』エスアイビーアクセス 2001

エルビン・シュレジンガー著 中村量空訳「『精神と物質:意識と科学的世界像をめぐる考察』工作舎 1999

ジム・アルカリーリ著『量子力学で生命の謎を解く』(BS クリエティブ kindle 版)2015

アレクサンドル・オパーリン著 江上不二夫訳『生命の起源と生化学』岩波書店 1956

ロジャー・ペンローズ他著，中村和幸訳『心は量子で語れるか』講談社 1999

エルビン・シュレジンガー著 岡小天 鎮目恭夫訳『生命とは何か：物理的に見た生細胞』岩波書店 2008

スヴァンテ・アレニウス著 寺田寅彦訳『宇宙の始まり：史的に見たる科学的宇宙観の変遷』第三書館 1992

チャンドラ・ウィックラマシンジ著 松井孝典 監修 所 源亮訳『彗星パンスペルミア：生命の源を宇宙に探す』恒星社厚生閣 2017

小林優子著「神の全知と矛盾：パトリック・グリムの全知全能批判について」2007（ 国立国会図書館リサーチ情報掲載 18821510,p.78-p.86 掲載誌名：東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室「哲学研究論集」所収）

藤波尚美『ウィリアム・ジェームスと心理学：現代心理学の源流』頸草書房 2009 勁草書房

石井加代子「心の科学としての認知科学」理化学研究所ライフサイエンス編「科学技術動向」2004 年7月号所収

松島公望・川島大輔・西脇良編著『宗教を心理学する：データから見えてくる日本人の宗教性』誠心書房 2016

理化学研究所脳科学総合研究センター『脳研究の最前線』上巻,下巻 講談社 2008

松井孝典『生命はどこから来たのか：アストロバイオロジー入門』文芸春秋社 2013

杉岡良彦『神は妄想か?:無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』教文社 2012

白澤卓二「老化学説と老化抑制」日本老年医学会誌 47 巻 1 号所収 国立長寿医療研究センター 2010

二間瀬敏史『宇宙物理学』朝倉書店 2014

高原文郎『新版宇宙物理学：星・銀河・宇宙論』朝倉書店 2015

中村 運『生命科学の基礎』化学同人社 2003 年
河野哲也『暴走する脳科学』光文社 2009
松井孝典『地球外生命の可能性をさぐる』NHK 出版 2015
本川達雄『人間にとって寿命とはなにか』講談社 1976
中野信子『脳科学から見た祈り』潮出版社 2011
横山順一『輪廻する宇宙』講談社 2015
道又 爾『心理学入門一歩手前:「心の科学」のパラドックス』勁草書房 2009
青木 薫『宇宙はなぜこのような宇宙なのか』角川書店 2016
吉田伸夫『宇宙に「終わり」はあるのか』講談社 2017
吉川敏一『フリーラジカルの科学』講談社 1997
長沼 毅『生命の起源を宇宙に求めて: パンスペルミアの方舟』化学同人社 2010
池内 了『宇宙論と神』集英社 2013

田舎のお寺から，宗教心理学研究会へ

武田正文(浄土真宗本願寺派高善寺，臨床心理士)

宗教心理学研究会発足 15 周年おめでとうございます。研究会にはコンスタントに参加できているわけではありませんが，宗教と心理学を超えた研究会がこうして力強く続いていくことは非常に重要で喜ばしいものであると考えております。

私は島根県と広島県の境にある山奥のお寺で僧侶をしており，また臨床心理士として地域の学校などでカウンセラーとして働いています。

過疎，高齢化の進んでいる地域ですので，新しいことや画期的なできごとが起こることはめったにありません。

昔ながらの伝統を守り，地元に根付いた住民たちと一緒に毎日を暮らしています。

僧侶の役割としては，お葬式や法事に参り，読経や法話をします。ゆるやかに地域のなかでつながりながら，少しずつ仏教について伝えていく日々です。

この毎日のなかでは，宗教が大幅に心理状態を改善したり，社会にインパクトを与えたりということはありません。

お寺に帰った当初は，仏教の役割を最大化することが必要であると頑張っていた時期もありました。

しかし，年月を重ねるごとに，日々のこうした緩やかな繋がりこそがとても大切なように思うようになりました。あまり大きな影響を及ぼしているわけではないので，社会からは注目されないかもしれません。時代の流れのなかでは，少しずつ存在感が薄れてしまうのかもしれません。

それでもそこには，日々を生きている人々がいて，そして，その人たちは何気なく仏壇に手を合わせるということを続けておられます。

家族の死は，地域の仲間たちの助けを借りながら，通夜や葬儀を行います。そして，その後は，家族・親戚と一緒に数年ごとに法事を勤めます。

本当に淡々と進んでいく，その時間のなかで悲しみが癒され，子どもにいのちを教えるきっかけになっています。

この度，様々な宗教とアイデンティティの関連を調べる研究のお手伝いをさせて頂きました。全国の僧侶仲間たちにお願いして，それぞれのお寺にお参りしている人たちにアンケートを取っていただきました。

私としては，お寺にお参りしている人は仏教徒である自覚を持っていることは少なくて，仏教らしいアイデンティティというものがあるのだろうかということを思っておりました。

仏教は家の宗教として受け継いだもので，主体的に選び取った信仰でないのでアイデンティティへの影響は少ないと予想していました。

ここでは詳しい結果についてはご紹介しませんが，宗教間の違いが表れていました。そして，仏教，浄土真宗の特徴が表れていました。

結果のあらわれ方ももちろん重要ですが，私は僧侶自身が気づいていない仏教の役割や意義を宗教心理学が明らかにする可能性を感じました。

長い歴史のなかで淡々と引き継がれていたものは当事者にとっては当たり前のものになり，客観的に理解することが難しくなるのではないでしょうか。

現在，そして，これからの未来のなかでは，宗教の役割というのは，一段と分かりにくくなってしまうかもしれません。宗教家自身も役割を果たしているのかどうか不安になるかもしれません。

宗教心理学では，このあいまいで当事者たちには意識化しにくい宗教の役割を，実証的に明らかにすることができることでしょう。ここには学問的な意味だけではなく，各地で脈々と続いている宗教的な伝統にも改めて意味づけができるようになるのではないかと思います。

私は自分でも研究に取り組んでみたい気持ちは持っているのですが，日々の生活に追われ，なかなか手に着かずにおります。しかしながら，宗教心理学研究会においては，全国各地，様々なお立場の方が宗教について深い考察をなさっておられます。ここに触れさせていただくなかで，私自身も勇気をもらい，モチベーションを持続できています。

これから先も，宗教心理学研究会が続いていき，そして，その輪が広がっていくことを念じております。どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。

宗教心理学および宗教心理学研究会の「これまで」と「これから」

中尾将大（大阪大谷大学，関西地区勉強会世話人）

先日，研究会事務局の松島公望先生よりこの原稿の執筆依頼を頂戴しました。いただいた文書の中に「宗教心理学研究会が発足して 15 年になる」と記載されておりました。その時，率直に 15 年もよくぞ継続して活動を維持・発展されてきたものだなぁと感慨深いものがございました。私がご縁をいただき，宗教心理学分野の研究に着手したのが今から 11 年ほど前のことでした。ちょうどその頃にインターネットを通じて，この研究会の存在を知り，翌年に日本心理学会にて本研究会の企画で発表をさせていただく機会をいただきました。

その当時は「宗教心理学」と言っただけで何やら怪しいことをしているかのような印象を持たれるような状況でした。実際，筆者も宗教性の心理学的研究をしていると周囲の研究者に話すたびに眉をひそめて「そんな研究，怪しいからやめた方がいいよ」などと忠告（？）されたこともありました。ところが，近年，宗教心理学を取り巻く状況は大きく変わったと感じております。例えば，宗教心理学と銘打った研究プロジェクトが科研費に採用されたり，宗教心理学の専門書が出版されたりしております。この事実をみても， 11 年前と比較して，宗教心理学も心理学分野で市民権を得てきたといえると思いました。そのような状況が生み出された背景には宗教心理学研究会の地道な活動に負うところが大きいのではないかと思います。

このように宗教心理学を取り巻く状況が好転していく中で，ご縁をいただき，私は関西地区勉強会のお世話役をさせていただく機会に恵まれました。この勉強会は 2013 年 3 月よりスタートしました。本当に小さな組織ですが，地道に活動を続け，今年の 3 月でちょうど 5 年を迎えました。感謝なことに，これまでに多くの方々に足をお運びいただきました。その方々のお顔ぶれを振り返りますと，実に様々なお立場の方がおられたと思います。以上は宗教心理学と研究会の「これまで」ではないかと思います。以降では，宗教心理学および宗教心理学研究会の「これから」について述べさせていただきたいと思います。

これまでは「宗教心理学とは何か」と「宗教心

理学を学ぶ目的は何か」ということが混沌としていたと思います。実際，関西地区勉強会でも発足当初は手探りで，統一された目的はないままに，それぞれの立場からてんでバラバラに宗教的事象や宗教心理にまつわる研究成果を発表してきたと思います。ところが，ここ最近は，お集まりいただくメンバーの中にも宗教実践家など研究者以外のお立場の方や宗教心理学は専門外だが，分野自体に大変興味があり，ご自分の専門分野とすりあわせながら研究をしていきたいと申される方も参加されるようになりました。そして，それぞれの立場から宗教心理学を学ぶ目的とご自身の立ち位置を明確にされるようになってきたと思います。

大まかに述べますと，宗教にまつわる心的活動を科学的に研究し，知見を発見しようとする立場と宗教的事象にまつわる心理現象の知見を例えば臨床心理学や健康心理学分野などに応用させて役立たせようとする立場に分かれるように思います。例えるならば，研究を眼目とする基礎心理学と社会的貢献を目指す応用心理学のような関係といえるでしょう。私の目から見て，今，宗教心理学はそのような形に集約されてきつつあると思われます。上記の例になぞらえるなら「基礎宗教心理学」と「応用宗教心理学」とでも言えるのかもしれません。（私自身はこのちょうど中間的立場にいるように思います）

これから，宗教心理学の研究者は自分の立ち位置は一体どこにあるのか，「ワタシは今，ココにいる」という研究者としての座標軸を見据えて，活動を展開するということになってゆくでしょう。これまでの心理学の歴史を振り返ってみても，体系化された領域にて各研究者が方向性を持って研究をおこなうならば，その分野は全体として底上げされ，発展しております。例を挙げますと，私の専門分野のひとつである行動分析学も当初は心理学の分野としてどうかと批判の対象でしたが（例えば「こころなき心理学」などと揶揄されていた），現在はしっかりとした学問体系として発展をしております。行動分析学では，実験的行動分析と呼ばれる基礎分野と応用行動分析と呼ばれる応用分野に分かれて，まさに両者は両輪の車のごとく発展してまいりました。

以上を踏まえて宗教心理学は今後，少しずつ「体系化」が進んでゆくのではないかと思います。上記に示しました「基礎」と「応用」という用語は，これまでの心理学の歴史と筆者のお世話役としての経験を振り返りながら仮に述べたものです。ひょっとしたらもっと違った形での体系化が進む可能性もあるかもしれません。それが宗教心理学の「これから」であり，宗教心理学研究会はその流れの中で多くの有能な研究者を輩出し，体系的な学問分野として形成されてゆくことでしょう。それこそが，本研究会が担っていくであろう「これから」ではないかと思っています。関西地区勉強会も，ささやかながら，活動を通じてわずかでもその役割の一翼を担ってゆくことができればと願うものです。読者の皆様と共に，宗教心理学のさらなる発展を願いつつ，生産的かつ建設的に，力強く歩んでいこうではありませんか！

災害の中，思うこと

中野美加(高槻市保健所)

2018 年，6 月から 7 月にかけて西日本では災害が続きました。6 月 18 日の大阪北部地震以降，大雨，土砂災害，水害と続き，7 月下旬現在も，日本列島は台風の襲来を受けています。

以来，筆者（震源地在住）の頭から離れない言葉があります。それは宮澤賢治の童話「学者アラムハラドの見た着物」の中で，「人はどういうことがしないでゐられないだろう」というアラムハラドの問いに，子どもたちが答えた言葉「人はほんとうのいいことが何だかを考えないでゐられない」です。30 年くらい前に読んだ童話ですが，震災以来，記憶の底からふって湧き出してきました。

このひと月は，日本中のいろんな県名のゼッケンをつけた人たちが市内至る所で，作業のサポートをしてくださり，ヴォランティアの方たちが次々登録して下さって本当に心強かったです。顔も名前も知らない人たちがツイート（筆者は読む専門ですが）で励ましてくださいました。地震から数日は，市のホームページに中々アクセスできなかったのですが，ツイートで有益な情報を流してくださり，水道やガスの現況をスクリーンショットで提示して下さいました。それぞれの方たちが今「ほんとうのいいこと」は何か考えて行動に移してくださったのだと思います。

宗教心理学研究会が発足して 15 年になるということは，21 世紀になってから発足したのだなあと改めて思いました。21 世紀は，日本に限らず世界中で大きな自然災害が起こりました。メディアの発達によって視覚的に目の当たりにする機会が増えただけかもしれませんが，その度に人々は打ちのめされながらも学び，次への対策をとり，ハザードマップ等が整えられ，災害に備えました。そして次の災害でまた新たな課題が与えられ，の繰り返しだったと思います。最近に限らず太古の昔から，人はこの繰り返しの中，生き延びてきたのでしょう。災害と宗教とは密接な関係にあります。自然災害を前にして，いくら対策を講じたとしても人は無力で，祈るか念じるかしかない時があるからです。

また，この私は無事だったけど，誰々は犠牲となった，何故？という不条理への思いを，科学的に処理するのは中々に難しいです。冒頭に挙げた賢治の童話ですが，このよい事を考えないではいられない気持ちや，不条理を前に祈らずにはいられない気持ちとは一体何なのか，それを人々に伝えていくのが宗教心理学の仕事かなあと今回思ったことです。きちんと言葉で伝えていきたいなと，災害の中で思ったことを呟かせていただきました。

研究会発足15周年に寄せて

西脇　良（南山大学）

「宗教心理学研究会 HP 案」ならびに同「ML 案」。これが，幾多のパソコンを乗り換えてきた私が所有する，本研究会最古の手持ち資料である。日付はいずれも，2003 年 6 月 19 日となっている。本研究会立ち上げ当初，松島先生と相談して，私がホームページとメーリングリストを担当することになり，内容構成案として作成したものである。

本研究会の，まさに「要石」というべき松島さんとの出会いは，したがってそれ以前に遡る。私の記憶によれば，1999 年 10 月に立教大学で開催された「日本青年心理学会第 7 回大会」において，松島さんのご発表「宗教的人格形成モデルの構成」を聞いた時である。当時よりお世話になっていた本研究会会員である齋藤耕二先生（東京学芸大学名誉教授・元日本青年心理学会

会長）が発表のことを教えてくださった。松島さんの，熱のこもった口頭発表の雰囲気から，てっきり私は，自分よりもかなり先輩の助教授かと思っていたが，挨拶を交わしてみると，年下で，かつ，自分と同じく院生であったことを知り，驚いた記憶がある。大げさに聞こえるが，彼こそ，私が最初に出会った，著作を通してその名前を知っている故人ではなく，「生きている」宗教心理学者であった。

当時，心理学の一部門としての宗教心理学は国内でも停滞しており，個々の研究者が単発で研究を発表している，という状況であった。この状況を何とか乗り越え，緩やかな研究ネットワークを構築し，情報交換を含めた意見交換の場を設定しようではないか，というようなことを松島さんと語り合ったことを覚えている。当時私が住んでいた吉祥寺のカトリック教会にも足を運んでいただき，教会のロビーで煙草をふかしながら，あるいは，吉祥寺の喫茶店でこれまた煙草をふかしながら，モクモクと語り合った。会話の詳細は文字通り煙に巻かれてしまったが，煙草の煙だけは強烈に印象に残っている。

現在の宗教心理学研究会のホームページにも，立ち上げ当初の記録が「更新履歴」に残っている。それによるとホームページおよびメーリングリストの運用開始が同年 7 月 6 日，そして，現在も松島さんが変わらずに編集発行を担当してくださっている「宗教心理学研究会ニューズレター」の第 1 号の発行が， 2004 年 1 月 9 日であった。その「ニューズレター」第 1 号の中で，私は次のような「研究会への抱負」を述べている。以下，抜粋させていただく。

「研究会への抱負を述べるとすれば，資料情報センターとしての機能をこの研究会が果たすことができるように，何らかのお手伝いができれば，と考えている。 … これまで宗教心理学に関心を寄せる研究者は，個々ばらばらに資料収集に四苦八苦していたのではないかと思う。たしかに資料収集に苦労することも大切であるが，研究分野そのものの発展という見地からみた場合，もうすこし便利な状況があってもよいかもしれない。とくに今後の若手研究者の育成という観点から，資料面でも一定の寄与を果たすことは，研究会の活動目的にもかなっていると思う。そこで，たとえば，⑴会員各自が所有している文献目録を集めて公開する；⑵会員各自がレビューした調査研究を一定の形式で整理して集め，公開する；⑶とくに宗教性測定尺度などは，質問項目リストまで含めて集め，公開する，などの作業を行ってゆければと考える。このプロジェクトのため，たとえば会員のボランティアを募り，収集や公開の方法を話し合ったのち，期限を定めて少しずつでも公開してゆく，という形があり得るだろう。もしこのアイデアが会員の賛同をえるところとなれば，筆者も積極的に作業に参加してゆきたい。」（「宗教心理学研究会ニューズレター第 1 号」14 頁）

15 年前に比べ現在は，データベースへのアクセスや利用方法が格段に向上しているため，上に抱負として述べられた内容はほぼ達成されつつある，といっても良いかも知れない。ただそれだけでは不十分であることに， 15 年経ち，今更のように気づく。それは，収集された膨大な情報を解釈していく作業である。つまり，「宗教心理学研究史」として再構成していく作業である。

研究会発足からほどなくして，奉職する大学の附属小学校の設立とその後の運営に携わることになり，ここ十数年，研究から足が遠のいてしまっている。本研究会への参加や協力も思うようにできず，大変申し訳ない想いである。おぼつかない状況ではありながらも，それでも，私が今後，国内の宗教心理学研究分野に何か少しでも貢献できること，貢献すべきことがあるとしたら，それは，研究史の構成であろうと思う。これまた仕事としては遅々として進んでいないが，戦前に活躍した児童心理学者，宗教心理学者の関寛之（ 1890-1963 ）をここ数年来追い続けているのは，彼なしに宗教心理学研究史は描けない，と考えているからである。

15 年前，煙草の煙をくゆらせながら松島さんと語り合った日々は去ったが，「日本の宗教心理学研究のために私が出来ることは何か」と考える姿勢だけは，いまでも変わらない。手を合わせ，お

祈りしているフリをしながら薄目を開けてこっちを見ている低学年児童を前に，そう思う。

宗教心理学研究会に参加して
ー今日までの日々を振り返るー

橋本広信(群馬医療福祉大学)

2011 年に出版された『宗教心理学概論』は，2003 年の夏に発足をした宗教心理学研究会の主要メンバーが執筆した記念碑的な著書であった。私が，著者に名を連ねている齋藤耕二先生からこの研究会への参加を勧められたのは，その数年前であったと思う。それは，コラムの著者にも名前が出ている西平直喜先生（創価大学名誉教授）のもとを巣立ち，慣れない群馬の地で大学教員としての生活を始めたものの，日々の事務仕事や学生指導，授業などに追われ，自分を見失いかけていた頃だった。

それまで，「宗教学」も「宗教社会学」も，「宗教心理学」もまともに学ぶ機会はなかった。自身の信仰経験はそれなりに持ちながらも，それを学術的に語る知識や言葉もなかった私が，専門家の集まりに参加するということに大きな躊躇いがあった。しかし，「宗教」という，心理学研究の場ではめったに研究テーマにとりあげないようなものをめぐって語り合う場が本当にそこにあるなら，きっと得るものが多いに違いないという予感がしていた。

参加をしてみれば，中心者の松島先生の考えなどもあり，そこは「宗教」をキーワードとして何かを考えようという様々な立場の人が集い学び合い，研究の機会を探る場になっていた。個人としては自分の非力さゆえ，残念ながら研究会全体でのプロジェクトなどには参加できていないが，日本心理学会での定期的な学術研究発表，メンバーによる共同研究や著書の出版など，着実に成長をし，成果を出してきたのだと思う。

私はただ早めにこの会に参加をしただけで，参加した小さな研究会でおしゃべりをしているだけというのが実際である。ただ，そんな関わり方であっても基本的に排除をされることはなく，多様な背景を持った方々が集うスクランブル交差点のような場がそこに存在し続けていること自体がありがたい。会の維持に関わっているみなさまに対しては頭の下がることばかりである。

私自身は，相変わらず宗教と関連事項（人物等）に関して，純粋な研究者としての視点で宗教を見たいわけではないのだと思う。また，信仰当事者としてただ自分の信仰対象に関する（基本的には学術的に肯定するための）現象理解をしたいがために参加しているわけでもない。それは，どこまでも信仰を同じくする人のための励まし以上のものにはならないと思うからである。

私自身は学術的な成果をまったく出せていないにもかかわらず会に関わり続けているのは，おそらく，（何らかの）宗教がある人とその人生，またそれが社会生活にもたらす「何ものか」によって，大きく人生を支えられる人がいる，変わる人が現にあるという事実に興味を失っていないからだろう。宗教でしか引き出せない力や思考，意志がまだまだあると思う（それが現実生活の中から，生きられる可能性を排除してしまうものももちろんあるとも思う）。そして，それが，多様な宗教それぞれに存在するという事実をもっときちんと捉えたいと願っている。研究発表会などで，そうした「何ものか」について様々な研究や考えを聴けるのは幸せであると思う。

また，医療や科学が進めば進むほど，命をどう考えるか，幸福をどう考えるべきか，どのような選択をすべきなのかの基準が混迷の霧に覆われる中，かえって宗教的な次元からしか提供できない命と人生と幸福のための選択の論理は新鮮であり，本質的に考えるべき問題は何かということに対する知恵の源泉としての宗教の価値にも興味がある。本来，私が向いているのは，こうした

宗教と人生の接点を考えることなのだろうなと改めて感じている。

宗教心理学という言葉は，果てしない大海のようなイメージを与える。宗教団体の数は無数にあり，教義のバリエーションや信仰対象も無数に存在する。同じ宗教を信じる者であっても，宗教への関わり具合や信仰心の強度や濃度には様々な程度がある。いったい，何を見ることが，宗教現象の包括的な理解となるのか，その枠組みについては，いまだ自分にはイメージがつかめない。まるで大海上を漂う小船のような心細さを常々感じている。

仮に，「宗教性」というあらゆる宗教行為や信仰者に共通の性質を表わすような心理を想定することは可能なのだろうか。さらに，それを数値化していくこと，共通に理解するための指標なども想定可能なのだろうか。

宗教心理学に関する実践や知識を増やす努力をこれからもしつつ，こうした素朴な問いに対して明快な答えを実感することが出来ることを楽しみにしている。宗教心理学研究会は今後も多くの参加者を得ながら，いつか宗教心理学会へと拡大発展を遂げることが望ましいとは思う。私個人としてはいい意味で素人的な関心を失わず，いろいろな立場，関わり具合の人たちが，それでも気軽に参加できるような多様性の土壌がこのまま残るようだと嬉しく思う。研究会の対象とする宗教と宗教現象自体，そして，そこに接点を持つ人自体の多様性が前提として存在することは，いつまでも変わることはないと思うからである。

今後も，着実な会の発展のために，少しでも何かできる事を探していきたいと思う。

宗教心理学研究会へのアタッチメント

森　真弓(東京神学大学)

この研究会が発足して 15 年。出会いからも 15 年。それは，修士論文と格闘していた頃のこと。自分が知りたいこと，やりたいことがどうしたら論文という形になるのかを思い巡らし，悶々としていました。そんな時に友人から松島公望氏の研究について情報をもらいました。見知らぬ人であったけれど，知りたいという情熱と論文からは逃れられない現実から，勇気をもって松島氏にメールを送らせていただいたのが始まりでした。

当時の私は，クリスチャンの精神的健康と信仰について関心がありました。どうしてフロイトがクリスチャンのことを「集団神経症」や「小児神経症」と呼んだのか，その見解は的を射ているのか（正しいのか）を知りたくて，それを検証出来ないものか探っていたのです。松島氏からは，精神分析は量的研究にはそぐわないというようなアドバイスをもらったと思います。同時期，在学していた院の博士課程に西脇良氏がおられました。西脇さんからはその柔らかなお人柄から出てくる励ましに随分と支えられていました。助言や励ましは心強いものでした。

この 15 年間，私個人は研究をもってしてはほとんど会に貢献できずに過ごしてきました。個人としての前進も疑わしい。学問としての宗教心理学にどのような変化があったのかについての評価や批判は，私には難しい。しかしそれでもなお，この研究会への愛着や所属意識が私を支えてくれているということに変わりはありません。15 周年を迎える今，それは一体何故なのだろうと再度，整理してみました。

今，私は発達障害関連の本を書いています。発達障害と向き合う時，まだまだ差別意識というものが多くの人の中にあることを感じています。それが受容を妨げ，支援を遅らせていることも否めないと。その差別意識と向き合うためには，もっと深いところでの人間理解や，時代に流されない，変わらない価値観のようなものが必要なのではないかと，学校現場の只中にいて，そう思えます。執筆中のものは症例紹介が中心の内容で，そのテーマについて掘り下げてはいないのです

が，そういったテーマを残し持っている私は，臨床心理学や発達心理学，スクールカウンセラーや介護する人というくくりだけでは居場所が見つからず，宗教心理学という畑が自分に居場所を与えてくれるように感じるのです。そしてその目に見える場所が宗教心理学研究会です。

普遍的な価値観ということになると，矛盾するのですが，自分の信仰という枠が生じてしまいます。宗教心理学研究会には様々な宗教者が所属していて，勉強会等でその方々と交わることができます。その接点が，生きる姿勢にも研究する姿勢にも謙遜さを与えてくれます。勉強会に参加していて私には難しいなと感じる研究もあります。それでも，それが誰かの益となることをいつも探そうとします。私は，会員の H 氏からも多くを学んで来ました。氏とはたぶん信仰は異なっていると思いますが，その講義内容のネット公開は食いつくように読みました。研究動機について H 氏にきちんと聞いたことはなかったと思いますが，見知らぬ一匹の猫に礼を尽くす氏にはその研究にも温かみがあるように思えます。私にとっての H 氏のみならず，この人から学びたいと思える研究者が宗教心理学研究会には多くいることと思います。

さて，15 年前のフロイトに物申すという修士論文は，方法論からみれば幼稚なものであったとはいえ，私個人はとても楽しむことが出来ましたし，信仰の後輩達に心理学を教えるに大きな指針となりました。私の認知が衰えてしまう前に，もう一度やりたい研究を手がけた時には，松島さん，また宜しくお願い致します。会をリードし続けて下さり感謝です。

宗教心理学研究会15周年に寄せて

渡邊　学(南山大学)

松島公望先生から 4 月に原稿依頼をされて，宗教心理学研究会が 2003 年に設立され，15 周年を迎えることを知らされた。私は，設立当初には関わっていたが，その後，忙しさに紛れ，まったくと言ってよいほど関わってこなかった。その意味で，はたして私がここで寄稿することが望ましいことなのかどうか心許ないが，簡単な感想やコメント，提言などができればと考えて引き受けることにした。

宗教心理学という分野は，位置付けがなかなかむずかしいものである。宗教学にとっても心理学にとっても周縁的な学問領域と言っても過言ではないだろう。一方で，宗教学の分野で宗教心理学をやっているというと，あなたは，宗教の本質が心理学的な方法論でわかると思っているのかと問われることになるし，他方で，心理学の分野からすれば，なんでそんな変わったものに興味を抱いたのかと問われることになり，いずれにしても，ある種の弁明をすることがついて回ることになる。

私はもともと哲学が出発点だったので，とりわけそのような「偏見」を向けられることが日常茶飯事となっていたが，結果的に思想史的な立場を取ることによって，かろうじてユングなどの研究を続けている次第である。

私は長年，アメリカ宗教学会（American Academy of Religion）に参加するとともに，同学会の国際委員会委員や宗教史関係のパネルの運営委員を担当していた。そのような環境で，宗教心理学が関わるパネルにも顔を出していたのだが，基本的には「なぜ宗教心理学は衰退してしまったのか」という問いが中心を占めていたように思われる。AAR では，ピーター・ホーマンズやロバート・ブラウニングなどの活躍が懐かしまれていたように感じられた。ジェームズ・ジョーンズが現役だった当時なので，彼に新たな期待が向けられていたように思われる。私も彼と研究交流を持ち，幸いなことに，彼の著書を翻訳させていただいた（J.W.ジョーンズ『聖なるものの精神分析』（玉川大学出版部，1997 年）。

このような状況の中で，宗教心理学研究会が2003 年に，以下のような目標を立てて活動をはじめたことは，此界において大きな希望であったと思われる。

ホームページには，「この研究会は，日本における宗教心理学的研究の活性化をめざして，2003 年夏に設置されました。心理学・社会心理学・社会学・宗教学など，様々な分野の研究者による交流の場となれば幸いです。具体的には，研究発表会の開催・メーリングリストの運営・ニューズレターの発行などを行っています」。

研究発表会の開催やメーリングリストの運営，ニューズレターの発行などを持続的に行うことは，たいへんな負担であると思われるが，長年にわたって松島先生をはじめとする運営委員の方が続けてこられたことに敬意を表したい。学会組織であれば，2 ～ 3 年単位で担当者が代わっていくのが一般的であるが，これだけ長く続けられたことにはたいへんな努力が費やされたことであると拝察する。私自身，東西宗教交流学会というこぢんまりとした学会の事務局を 20 年間続け大いに疲弊した経験があるので，事務局には共感と懸念の両方を抱いている。さらに，15 年 20 年と続けるためには，できるかぎり，責任を分担することが重要であろう。

この宗教心理学研究会を母体として，片や啓蒙的な活動をするとともに，片や研究実績を積み重ねているのはすばらしいことである。研究会以前に完成されていた業績とは言え，翌年の 2004 年には，西脇良先生の『日本人の宗教的自然観――意識調査による実証的研究』（ミネルヴァ書房，2004 年），杉山幸子先生の『新宗教とアイデンティティ――回心と癒しの宗教社会心理学』（新曜社，2004 年）が出版され，本会の活動を推進する原動力となっていったように思われる。

また，2005 年度（基盤研究（ C ）企画調査「宗教心理学の大系化に関する研究 ―宗教心理学の社会的貢献にむけて―」）と 2012 年度（基盤研究（ B ）『宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連――苦難への対処に関する実証的研究』（ 2012 年度～ 2014 年度））にはそれぞれ科学研究費補助金を得て研究活動を行い，それぞれ詳細な研究報告書を作成している。そして，さまざまな学会においてパネル発表やポスター発表，シンポジウムと業績を積み重ねていることはすばらしいことである。これらは，宗教心理学研究会が母体となって，着実に研究協力が展開され，実績を上げている証左であろう。

どちらかというと，宗教学寄りの宗教心理学研究としては，高橋原先生の『ユングの宗教論――キリスト教神話の再生』（専修大学出版局，2005 年），葛西賢太先生の『断酒が作り出す共同性―アルコール依存からの回復を信じる人々』（現代思想社，2007 年），堀江宗正先生の『歴史のなかの宗教心理学――その思想形成と布置』（岩波書店，2009 年）が顕著な業績と言えよう。

さらには，2011 年には松島公望先生の『宗教性の発達心理学』（ナカニシヤ，2011 年）が出版されている。本書は，先行研究を踏まえながら，意識調査を実施して宗教性発達モデルを構築するという意欲的な研究である。

さらに，教科書となりうる概論的な著作，金児曉嗣監修松島公望，河野由美，杉山幸子，西脇良編『宗教心理学概論』（ナカニシヤ，2011 年）が出版され，5 年後には松島公望，川島大輔，西脇良編著『宗教を心理学する』（誠信書房，2016 年）が出版されている。

このように，着実に成果を収めているのも高く評価できよう。

そして，より多くの研究者にとってありがたいのは，「宗教心理学関連文献目録」（ 2015 年 7 月 11 日）である。これを読むことによって，宗教心理学というジャンルが日本においてどのような歴史と広がりを持っているのかを一望できるからである。あえて注文を付けるとすれば，著者名順だけでなく，年代順のものもあると利用価値が高いのではないかと思われる。いずれにせよ，近いうちにアップデートされることを期待している。

あえて，今後の活動について提言をするとすれば，アメリカ心理学会やアメリカ宗教学会，国際宗教社会学会などの国際学会でパネル発表をすること，英語の論文集などを出版することなどが課題として挙げられよう。

私自身，数年前，ジョーンズ先生から日本の宗

教心理学に関する論文集を英語で出版することを提案されたことがあったが，残念ながら，実現には至らなかった。その提言を宗教心理学研究会に速やかに伝えるべきであったと反省している。

他方で，成功例としては，Christopher Harding, Iwata Fumiaki, and Yoshinaga Shin'ichi, eds., *Religion and Psychotherapy in Modern Japan* (London and New York: Routledge, 2015)を挙げることができよう。これは，京都大学宗教哲学関連の OB の研究会が母体となったものであるが，このような形で，宗教心理学研究会も国際発信していただければさいわいである。

宗教心理学研究会は，この 15 年の間に宗教心理学というジャンルを広く広めるとともに，学問的な貢献を多岐にわたって行ってきた。その成果をすべてここで挙げることはできないが，貴重な成功例をして評価することができよう。

今後は，持続可能な発展を遂げるために，事務局の責任体制の一新なども必要かもしれない。そして，海外学会でのパネル発表，英語での論文数の公刊などが課題として挙げられよう。また，現在のところ，実証研究が中心のようであるが，文系研究者の貢献度も増していけば，さらに，宗教学領域へのインパクトも高まるのではなかろうか。

私からは，これらの言葉をかけることによって，宗教心理学研究会の 15 周年を祝うとともに，今後の健闘に期待したいと思う。

事務局からのお知らせ

宗教心理学研究会ニューズレター第 28 号が発行されました。今号では，宗教心理学研究会発足15周年を迎えての特集を組ませていただきました。それぞれの原稿は非常にバラエティに富んでおり，私自身も多くのことを学び，考える機会を持たせていただきました。そして，これらの原稿に書かれた内容が一つでも実現する，今後，そのような活動を行うことができればとの思いになりました。

さらに，宗教心理学研究会がこの先日本の宗教心理学を牽引していくだけではなく，他の領域との連携・協働を行っていく橋渡し役としての役割を担っていく，そのような活動を行っていくことができればとの思いです。

ニューズレターを始め，これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見，ご感想をお待ちしております。(K.M)

発行：宗教心理学研究会
編集：宗教心理学研究会事務局

研究会事務局
担当：松島公望［ psychology-religion@office.so-net.ne.jp ］
研究会ホームページ管理・運営
担当：藤井修平［ yrsk.f@nifty.com ］

研究会ホームページ
http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/